

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報 No. 38

The Bulletin of the Thomas Hardy Society of Japan

修辭的挑発としての自然

ートマス・ハーディの現実観の一面ー	西村 智	1
動物との共感 ートマス・ハーディ小説 における動物愛護思想	福原俊平	14
『微熱の人』と大英帝国 ーポストコロニアル批評で 読むトマス・ハーディ	坂田 薫子	31
転覆させる十字 ー『森林地の人々』考察ー	亀澤美由紀	50
Jude the Obscure[d] ー『ジュード』における真の悲劇	鳥飼真人	62
Owen Graye's Desperate Remedy	MASAKI YAMAUCHI	78
Hardy's Misogyny: Reading <i>Jude the Obscure</i> as his Response to New Woman Fiction	JUN SUZUKI	89
Synopses of the Articles Written in Japanese		107
日本ハーディ協会会則		112

日本ハーディ協会

2012

修辭的挑発としての自然 ートマス・ハーディの現実観の一面ー

西 村 智

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) によって提起された現実に関する問題の中には、修辭的観点からの考察を特に必要とするように思われるものはいくつかある。その一例は、彼が「内在意志」(“the Immanent Will”) と呼ぶ、「善悪とは無関係に物事の背後で作用する無関心で意識を持たない力」(F.E. Hardy 337) の問題である。この力は、擬人法の問題と切り離せないものであり、しばしば「悪意と敵意を持った神」の概念に結びつけられてきたが、ハーディ自身はそれを「ひょっとしたら自意識を持つようになるかもしれないが、責任を負うことのない盲目的な」力と見なし、それが倫理を超越したものであることを強調している (F. E. Hardy 337)。ハーディの作品におけるこの力の擬人化された一つの表われは、「打撃」(“The Blow”) という詩における「内在的行為者」(“the Immanent Doer”) (24) である。この行為者は「目的を持った神」(22) ではなく「計り知れない、不可視の存在」(14) であり、「何も知らぬまま事を行なうが、いつの日か、己の分別を失わせている悪夢を払いのけ、現実を見てこう認めるかもしれない、『自分がこんなことをしたことを、深く後悔している』と」(24-28)。内在意志の別の形での表われは、『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*) における「神々の長」(“the President of the Immortals”) であり、小説の最後の段落でこの存在がテスの悲劇的な運命の形成に中心的役割を果たしてきたことが明かされている (373)。これについては、ハーディ自ら次のように説明している。「あのすぐれた著作、キャンベル (George Campbell) の『レトリックの哲学』(*The Philosophy of Rhetoric*) において『生命、知覚、活動、意図、感情あるいは何であれ感覚を持つ存在の特性を無生物に付与する文彩』として説明されてい

る、よく知られた比喩方法を用いることで、女性主人公に対立する諸々の力が一つの人格として諷喩化されたのである（想像性に富む散文や詩においては珍しくない方法である）」（F. E. Hardy 244）。

内在意志の以上のような擬人化の持つ認識論的意義は、カント（Immanuel Kant）が「活写法」（“hypotyposis”）という修辞的問題を論じる中で神に関する知識の性質に触れながら示唆していることと同種のものである。カントの言う活写法とは概念の直観的表象化を意味するが、これには対象を直接的に表象する「図式的」（“schematic”）表象化と類比によって間接的に表象する「象徴的」（“symbolic”）表象化の二種類があることを明確にした上で（226-28）、カントは次のように述べている。「単に何かを表象する方法を認識と呼んでよいのならば […] 神についてのわれわれの一切の認識は象徴的なものにすぎない。これを図式的なものに見なし、そこに悟性や意志など、その客観的実在性がこの世に存在する者においてのみ証明されるような特性を包摂させる人は神人同形論（anthropomorphism）に陥るが、これはちょうど、直観的なものをことごとく排除する人が理神論（deism）—この場合には、実際の見地からさえ、まったく何も認識することができない—に陥るのと同じである」（228）。言語的観点からは、「図式的」表象化は概念の字義的表現、「象徴的」表象化は概念の比喩的表現にそれぞれ概ね相当すると言えるが、カントが示唆するように、神の概念の表象化はそのような区別を突き崩してしまう。換言すれば、神についての認識は、比喩的にしか表現できないものの比喩すなわち「濫喩」（“catachresis”）の性質を持った擬人法に依存せざるを得ないのであり・・・、⁷ その程度に神学的論争や教義上の境界を超越する修辞的契機を含んでいるのである。このことは、内在意志に関しても当てはまることであり、この問題についての正しい理解を促してくれる。

内在意志の場合も誤解を招きやすいのは問題となっている概念そのものというよりはその表象化の方法である。この点を例証することは容易である。当時ハーディは、世界の原理として邪悪な気質を持った全知的存在を措定しているとして非難されたが、この種の批判への彼の応じ方は、創作における

修辞上の問題が宗教的信条の問題と取り違えられていると一貫して主張することであった（F. E. Hardy 243-44）。²⁾あるいはまたハーディは、「自然の質問」（“Nature’s Questioning”）という詩において、それが主題化する理神論的世界を擬人化しているとして批判された。³⁾アレン・テイト（Allen Tate）によれば、この詩は、そこに見られる「創造し、混ぜ合わせる力はあるものの、面倒を見る力を持たない何か巨大な愚かさ」（13-15）や「われわれの苦しみに気づかない自動機械」（17-18）などの表現からも察せられるように「理神論的不在者である神の怠慢」（“the neglect of the absentee God of Deism”）についてであるが、しかしこの神は詩の第二スタンザで生徒たちを威圧する学校の教師として擬人化されており、テイトの見解では、この擬人化は「その論理的意味と矛盾する」、なぜなら、「この擬人化された神が第五スタンザで述べられているように自動機械であるとすれば、彼は授業を教えることなどできないし、『面倒を見る力を持たない』とすれば、そもそも存在しているはずがない」からである（194）。

しかし、ハーディが、彼の描く世界を支配する存在すなわち内在意志をそれが概念上意味するような非人格的な力としてではなく何らかの人格を有する存在として表現しているというのはその通りであるとしても、それは回避しようとするれば回避することのできた過誤という類のものではない。というのも、ここでは、テイトの言葉を借りて言えば「知り得ないものの人格的な、擬人化された表象」（“the personal, anthropomorphic representation of the Unknowable”）（194）が問題となっているからである。ハーディが内在意志の人格的要素は比喩的なものにすぎないと強調しながら示唆しているように、それは、神と同様、それ自体としては不可知であって比喩的にしか表現され得ないのである。それゆえ、内在意志に付与された人間の特徴に基づいてそれを批判する場合には、比喩的なものを字義的に受け取るという誤りを多かれ少なかれ犯していることになる。その一方で、内在意志にいかなる表象的性格も認めるべきではないとするなら、それは対象に関する知識自体を拒否することにほかならない。帰結として言えることは、内在意志の概念は擬人

法による表象化を伴わざるを得ないが、その表象化は字義的な何かの比喩的表現ではなく、むしろ字義と比喩との区別それ自体を問題化する比喩用法であるということである。このような比喩用法は、すでに指摘したように濫喩と呼ばれるものであり、ここでもまた注目すべきことは、世界を支配する力の擬人化が、理神論に対立するものとしてではなく濫喩の一形態として暗に問題となっているということである。すなわち、内在意志の表象化の問題は、神学的見地からの解釈に手掛かりを与えるというよりは、むしろ擬人法と認識論との問題含みの関係性に注意を引くのである。

擬人法は、ハーディの自然の扱いにおいてもまた本質的な問題である。古代ギリシャ人が自然の様々な事物に人間的なイメージを与えたように、ハーディもまた自然を自然として眺めることに少なからず困難を感じながら、こう述べている、「生命のない自然の万物が私の目には沈思黙考する人々のように映ることがある」(F. E. Hardy 114)。これが意味しているのは、ハーディが自然に関心を寄せるとき、それは往々にして人のような存在として見られ扱われているということである。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) が評したように、ハーディは「自然のきめ細かな観察に長けた人」であり、場所による雨の降り方の違いや樹木の種類による風の音の違いを知っているばかりでなく、「より広い意味で一つの力としての自然に気づいており、人間の運命に対して共感したり、嘲ったり、あるいは無関心な傍観者でいたりすることのできるようなある精神をそこに感知している」(2: 246)。ここでウルフの言う「ある精神」("a spirit") とは、存在論的根拠を持つものではなく擬人化の産物であり、経験されたものとしての自然の中に感じ取ることのできる何かである。ハーディにとって、自然の擬人化は単なる比喩以上の問題であり、『青い眼』(*A Pair of Blue Eyes*) の中で彼はこの点に語り手を通じて注意を喚起している。「昼夜の大部分を屋外で過ごす黙想的な、風雨に鍛えられたイングランド南西部地方の人々にとって」と語り手は言う、

自然は詩的意味とは違うむら気を持っているようであり、ある時々

る行為に特別の好みを示すが、それを支配する何か明確な法則やそれを説明する特定の季節があるわけではない、そんなふうに見える。自然は、親切と残酷さを交互に、公平に、順序正しく撒き散らすことはせず、手に負えない気まぐれで無慈悲な厳しさか、あるいは圧倒的な寛大さを撒き散らす、そんな不思議な気質を持った人として解釈されるのである。
(172)

ここでは、自然に何らかの人格を付与することが「詩的」慣習の一つにとどまらず、イングランド南西部の一部の人々の場合には人間的性癖の一つであり、現実認識そのものに深く埋め込まれたものであると考えられている。このことは、ハーディの作品における他の多くの人々にも当てはまることのように思われる。そのような人々にとって、自然の意味はそのあるがままの姿にではなくその擬人化にあり、それゆえ問題は、自然が人のように見えるかどうかということではなく、自然がどんな人のようなものであるかということである。すなわち、ハーディの作品において擬人化は、自然に付加された何かではなく自然を構成する要素の本質的な一つであることがしばしば発覚するのである。

自然が持つとされるこのような人間性は、内在意志の場合と同様、存在論的に正当化されるものではなく、認識論的に問題含みである。実を言うと、ハーディにおける自然の擬人化は、ポール・ド・マン (Paul de Man) が “anthropomorphism” として定義する用法に近い。ド・マンによれば、“anthropomorphism” は単なる比喩ではなく「実体のレベルでの同一化」であり、それゆえそれは命題というよりはむしろ固有名の性質を持つものである (241)。この意味で、“anthropomorphism” はいわゆる “personification” と同じものではない。バーバラ・ジョンソン (Barbara Johnson) も指摘するように、「[ド・マンの言う] “anthropomorphism” は人間的なものの本質の所与性に依存するが、それに対して “personification” はそうではない」 (206)。人間性は、“personification” にとっては所与ではなく定義や解釈に開かれた一つの概念であり、それゆえ “personification” は人間性とは何かという問題を必然的に

提起することによって自らの認識論的圧力を抑制するが、“anthropomorphism”は人間性を問題化されることのない所与のものとして扱い、これを擬人化されるものの内在的な一面として固有名化してしまう。⁴ ハーディの『帰郷』(*The Return of the Native*)は、このような問題を劇化していると言えるかもしれない。実際、この小説で使われる「エグドン・ヒース」(“Egdon Heath”)という固有名は、単に物語の舞台としての荒野に与えられた虚構の名称であるだけでなく、⁵ 擬人化された荒野の所与のものとしての人間性を体現しているのである。

『帰郷』は、ハーディの作品の中で擬人化された自然と人間の運命との関係の問題を考察するのにとりわけ適した場である。この小説における擬人化された自然とは上で述べたエグドン・ヒースと呼ばれる荒野であるが、これが物理的な自然環境以上の何かであることは明白であり、それは作中人物に等しい存在として、あるいは内在意志の具現化として、しばしば見なされてきた。次の引用は、そのような見解の典型例である。「周知の通り、ヒースは物語の偉大な主役である。しかしそれはそれ以上の何かである。この自然と必然の象徴、永遠不変を暗示するこの野性的で多産で感情を持たない力は、(ハーディにとって)後に『テス』の『神々の長』そして『霸王たち』(*The Dynasts*)の『無意識的意志』(“the unweeting Will”)へと発展していったものに相当する」(E. Hardy 162-63)。ここでエグドンは物語の主人公であり、かつ非人間的な力の象徴であると述べられているが、こうした二重の存在様式は、それぞれ別個のものとして対等に並列されているというわけではなく、エグドンはまず人のような存在として確立され、それによって象徴として機能するということが含意されている。すなわち、エグドンは、小説中の言葉で言えばそれが「囲いのない荒野の限りない広がり」(31)としてではなく「タイタンのような姿」(31)をした巨大な人として見られるとき、人間の運命を支配する力の象徴となるのである。

だが、エグドンはまた、擬人化されることによって象徴以上の機能を担わされてもいる。この点は、上記の引用を含めエグドンについての批評的解説

の多くにおいて少なくとも暗に示されていることであり、D. H. ロレンス (D. H. Lawrence) による『帰郷』についての次の指摘もまたその一例である。「悲劇の迫真的感覚は小説の舞台に由来する。この小説の偉大な、悲劇的な力は何だろうか。それはエグドン・ヒースである」(415)。ロレンスがここで意味していることは、エグドンは「偉大な、悲劇的な力」を「象徴する」ということであるとも、そのような力「そのものである」ということであるとも、どちらとも受け取ることができる。この曖昧性は、エグドンの擬人化が二重の機能を持つものであることを示唆している。すなわち、エグドンは、擬人化されることで単なる認識論的文彩としてだけでなく、一部の作中人物にとっては現実に対して実質的な影響を及ぼしうる行為遂行的な力を持つものとして機能してもいるのである。⁶⁾

このことは、とりわけユーステイシア (Eustacia Vye) の物語において顕著である。彼女がクリム (Clym Yeobright) との会話の中でこぼしているように、彼女にとってエグドンは「厳しい仕事を負わせる残酷な主人」(“a cruel taskmaster”) である (182)。すなわち、ユーステイシアの物語においては、エグドンは憎悪すべき威圧的な敵対者として擬人化され、そのようなものとして彼女を挑発しているのである。『帰郷』におけるエグドンの擬人化は、ある程度までは彼女の心理と関係しており、その限りではそれはラスキン (John Ruskin) の言う「感傷的誤謬」(“the pathetic fallacy”) の一例であると言えるが、⁷⁾ 他方ではエグドンの擬人化には非人間化したり字義的なものに還元したりすることのできない側面があり、これがそのような誤謬を正当化しているようにも見える。この点を例証するものとして注目に値するのは、ユーステイシアが彼女の物語の終わり近くでエグドンを空しくさ迷う場面である。語り手はここで、雨の夜のエグドンの光景を、ユーステイシアの目にもそう映ったに違いないものとして次のように描いている。「夜の闇は陰鬱で、あらゆる自然が黒紗で喪装しているように見えた。[……] 彼女は池に沿って雨塚の方へ向かったが、途中で幾度もねじれたハリエニシダの根やトウシンソウの茂みや、この時期になると何か巨大な動物の腐った臓物のように荒野

に散らばる肉厚のキノコの湿った塊につまずいた」(320)。同時に語り手は、「彼女の精神の混沌と周囲の世界の混沌との調和ほど完璧なものではなかった」(320)と述べて、ユーステイシアのエグドンとの関わりには後者を嫌悪すべきものとして擬人化する感傷的契機が含まれていることに注意を引いてもいる。しかし、語り手の言うユーステイシアの内面の混沌と外部世界の混沌との間の「調和」(“harmony”)は、彼女とエグドンとの間に何らかの自然で必然的な結びつきがあることを意味するものではない。ここで両者間に類比関係が成立するのは、エグドンがユーステイシアの心理とは関係なく予め擬人化されているからにほかならない。語り手が第一章でエグドンを「人間性と完全に調和した場所」(“a place perfectly accordant with man's nature”) (33)と述べて示唆しているように、エグドンにはそれを言語の上で恣意的に作中人物と関係づける一般化された擬人化がその存在の本質の一部として始めから与えられているのである。この場合ほど明確ではないにせよ、同様のことが感傷的誤謬の事例一般についても言える。感傷的誤謬は人間の心理状態と自然現象との間の類比関係を前提とするが、この類比関係は自然が擬人化されることによって可能となるのである。それゆえ、感傷的誤謬は、擬人法の一形態であるばかりでなく擬人法の一つの結果でもあり、自然そのものとの関係において生じるというよりは、むしろ何らかの感情をそこに投影できるような、人間的感受性を潜在的に備えた存在としてすでに擬人化された自然との関係において生じるものなのである。

だが、自然は擬人法を基盤として人間の内面の比喩になりうるということが問題のすべてではない。実際、それだけでは、エグドンに対するユーステイシアの執拗な嫌悪の根拠を十分に説明することはできない。ここで考慮すべきもう一つの問題点は、指示対象としての人間精神はそれ自身に本来的な字義的表現に乏しく、したがってその比喩としての自然は比喩的にしか表現できないものの比喩、すなわち濫喩になりがちであるということである。語り手は小説の早い段階で次のように述べてこの点に注意を促している。「それ〔エグドン〕は、真夜中に見る逃走と惨事の夢の中で、われわれを取り囲

んでいると何となく感じられるが、その夢の後ではこのような光景によって蘇らされるまではすっかり忘れられている、あのおぼろげな荒野の初めて見る原型であるとわかった」(32-33)。ここで問題となっているのは、濫喩としてのエグドンの機能であり、エグドンは、抑圧された無意識の何か、夢の中で表出するような何かを換喩的に思い出させるものであるが、それはそのような比喩としてのエグドンの存在がなければ気づかれないままのものなのである。このことが示唆しているように、ユーステイシアの物語を理解するための重要な手掛かりの一つは、エグドンの濫喩としての擬人化の発語内的行為遂行力およびそれに対する彼女の発語媒介的反応にある。⁹ この観点から言えば、エグドンはユーステイシアにとって嫌悪の置き換えられた対象である。というのも、彼女が憎んでいるのは実はエグドンではなくそれが思い出させる何か、それが比喩化する彼女の内奥にある嫌悪すべき何かであると言えるとしても、これがそれ自体の本来の表現を持たず、エグドンを通じて表現されるのみであるとすれば、彼女の憎しみはエグドンに向けられざるを得ないからである。このようにエグドンは、ユーステイシアの精神にとって本質的であると同時に彼女の嫌悪の真の対象でもある何かの比喩として暗に自らを確立する一方で、その何かについての字義的な理解に道を開くことはなく、代わりにそこに自らを押しつけてくるのであり、そうすることで彼女の嫌悪を外部世界への投影という形で顕在化させるとともに、そこから逃れたいという彼女の願望に拍車をかけることになるのである。

『帰郷』のクライマックスであるユーステイシアの死が自殺にせよ事故にせよ何らかの形でエグドンと関わりがあるとすれば、それはロレンスも認めるエグドンの悲劇的な力の作用の帰結であると言えるが、同時にエグドンは擬人化されることがなければそのような力を持ち得ないとも言える。この観点からすると、『帰郷』においてはエグドンの擬人化の挑発をかわすことのできる者が最も適応的で幸福であるということになる。実際、ユーステイシアとは対照的にトマシン (Thomasin Yeobright) とディゴリー・ヴェン (Diggory Venn) がエグドンでの生活を生き抜き、二人の幸福な結婚でこの小

説を終わらせるのは単なる偶然ではない。⁹ この二人が幸福を達成することができる、あるいは少なくとも悲劇の渦中から離れていることができる主たる理由の一つは、彼らはユーステイシアを破滅へ導くような言語的誤謬に幻惑されることがないということにある。トマシンについて、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は次のように述べている。「トマシンにとって、出来事はその公然と見えるありようにおいてそのまま理解できるものである。彼女は意味というものを不透明な事実から綿密な解釈によってもぎ取る必要のあるものとは見なさない」(158-59)。この一例として、イーグルトンは、小説の最初の方でトマシンが結婚することなく教会から戻ってくる場面に言及している(158)。この場面で、彼女の叔母が、「こんなみっともないことをして、どういうことなの」と説明を求めて尋ねると、彼女はこのように答える、「ご覧になっておわかりの通りです」("It means just what it seems to mean") (60)。同様のことは、トマシンのエグドンの見方にも当てはまる。ユーステイシアが死を迎えることになる雨の夜、彼女が見るエグドンは先にも触れたように彼女の内面の混乱を反映して不気味な様相を呈するが、トマシンの目に映るその光景は不合理に歪曲されることなく自然そのものの姿に近い。

彼女〔トマシン〕にとっては、ユーステイシアの場合とは違い、空中に悪魔もいなければ、茂みや枝に悪意が潜んでいるわけでもなかった。彼女の顔に打ちつけるものは、蠍ではなくただの雨粒だった。エグドン全体は怪物などではなく、非人格的な広々とした土地空間であった。この場所に対する彼女の恐怖は合理的なもので、その最悪の雰囲気は彼女が嫌うのもっともなことだった。この時点では、そこは、彼女の目から見れば、風の強い、湿った場所で、とても不快に感じ、注意しなければ道に迷い、ことによると風邪をひいてしまうかもしれない場所であった。(329)

「非人格的な広々とした土地空間」("impersonal open ground")—これがトマシンにとってのエグドンであり、ヴェンが関わっているのもまたそのようなものとしてのエグドンである。ユーステイシアや、彼女とは対照的にエグドン

を愛するクリムとは異なり、トマシンとヴェンは、エグドンを積極的に擬人化することなく、というよりはむしろその擬人化を何らかの形で極力非人間化することによって、そこでの生活に適応しているのである。

これら二人の人物のエグドンとの関わりが示しているように、『帰郷』における自然の擬人化は、ハーディの他の作品においてと同様、自然そのものに人間的な何かがあるということを意味するものではない。ハーディにとって、自然そのものの中には愛すべきものも憎むべきものもない。彼にとって問題なのは、人間の自然との関わりは、多かれ少なかれ不可避免的に、そしてしばしば過剰に、擬人法を巻き込んでしまうということである。この観点から言えば、ハーディの自然への関心は、擬人法への偽装された関心である。彼の作品の中で『帰郷』がおそらくその最良の例であり、そこでは自然の人間への影響の問題が、擬人法の人間への挑戦という言語的問題にずらされているのである。

注

* 本稿は、カリフォルニア大学アーヴァイン校大学院に提出された博士論文（2003年）からの抜粋を書き改めたものであり、またその一部はテキスト研究学会第五回大会（2005年8月26日、於：青山学院大学）において口頭で発表された。

1) ここで言う「濫喩」は字義的表現を持たない比喩用法を指す。また、擬人法イコール濫喩ではないが、擬人法には濫喩の例が少なからず見られる（例えば、“leg of a table”, “face of a mountain”など）。

2) 『テス』の第五版およびそれ以降の版に付けられたハーディの序文においても同種の批判とそれへの応答に関する言及がある（25）。

3) この問題については、Nishimura, “Thomas Hardy and the Language of the Inanimate” 908-09 参照。

4) Nishimura, “Review of Barbara Johnson, *Persons and Things*” 122 参照。

5) 『帰郷』に付けられたハーディの序文によれば、「エグドン・ヒース」は、小説の舞台のモデルとして一元化され、類型化された数々の実在の荒野の総称である（27）。

6) よく知られているように、J. L. オースティン (J. L. Austin) は何か事を為す言語の用法を「行為遂行的」(“performative”) と呼んだ。彼はまた、行為遂行的発話の作用とその実際の効果とを区別

し、前者については「発語内的」("illocutionary")、後者については「発語媒介的」("perlocutionary")という用語を使用した。

7) 「感傷的膜膠」については、Ruskin 5: 201-20 参照。

8) 注 6) 参照。

9) 『帰郷』の最後から二つ目の章に付けられた注で述べられているように、トマシンとヴェンの結婚という結末はハーディが望んだものではなく、連載事情により書き換えられたものであるが、原案においても二人が悲劇的な結末を迎えるということではなく、現状維持の生活を続けてゆくことになっており (356)、この場合でも彼らがユーステイシアとは異なるタイプの人物であることは明らかである。

引用文献

- Austin, J. L. *How to Do Things with Words*. Ed. J. O. Urmson and Marina Sbisa. 2nd ed. Cambridge, MA: Harvard UP, 1962, 1975. Print.
- De Man, Paul. *The Rhetoric of Romanticism*. New York: Columbia UP, 1984. Print.
- Eagleton, Terry. "Thomas Hardy: Nature as Language." *The Critical Quarterly* 13.2 (Summer 1971):155-62. Print.
- Hardy, Evelyn. *Thomas Hardy: A Critical Biography*. London: Hogarth, 1954. Print.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*. London: Macmillan, 1962. Print.
- Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy*. Ed. James Gibson. New York: Macmillan, 1982. Print.
- . *A Pair of Blue Eyes*. New Wessex Edition. London: Macmillan, 1990. Print.
- . *The Return of the Native*. New Wessex Edition. London: Macmillan, 1990. Print.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. New Wessex Edition. London: Macmillan, 1990. Print.
- Johnson, Barbara. *Persons and Things*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2008. Print.
- Kant, Immanuel. *Critique of Judgment*. Trans. Werner S. Pluhar. Indianapolis: Hackett, 1987. Print.
- Lawrence, D. H. *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. London: William Heinemann, 1936. Print.
- Nishimura, Satoshi. "Review of Barbara Johnson, *Persons and Things*." *Studies in English Literature English* Number 53 (2012): 118-23. Print.
- . "Thomas Hardy and the Language of the Inanimate." *SEL Studies in English Literature 1500-1900* 43.4 (Autumn 2003): 897-912. Print.
- Ruskin, John. *Works*. Library Edition. Ed. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. 39 vols. London: George Allen, 1903-12. Print.

Tate, Allen. "Hardy's Philosophic Metaphors." *Collected Essays*. Denver: Alan Swallow, 1959. 185-96. Print.

Woolf, Virginia. *The Common Reader*. 2 vols. London: Hogarth, 1984, 1986. Print.

動物との共感——トマス・ハーディ小説 における動物愛護思想

福 原 俊 平

1. 序論

晩年のトマス・ハーディが動物愛護運動に強く賛同したことは、よく知られた事実であろう。¹⁾ ハーディは反生体解剖論者であり、キツネ狩りや狩猟にも強く反対し、近隣の人々を困惑させた (Lansbury, 201)。1924 年には、王立動物虐待防止協会 (RSPCA) の 100 周年を祝し、“Compassion” と題した詩を捧げるなど、動物愛護運動に強い関心を示した。動物愛護運動に積極的になったのは、確かに晩年のことであるが、それ以前に書かれたハーディの小説においても、動物愛護的な発想は見ることができる。生命の平等を感じるクリムや、動物に深く同情するテスやジュードなど、動物や自然界はハーディ小説において大きな役割を果たしている。本論では、*Tess of the D'Urbervilles* と *Jude the Obscure* を中心に、主人公が動物に同情する場面を取り上げ、ハーディの動物愛護思想の特徴を分析したい。以下では、ダーウィンの進化論や動物愛護運動の言説など、同時代の文化的なコンテクストとの関係において、ハーディの動物愛護思想の特徴を示した上で、小説というテキスト内部において、動物との共感の場面がどのような働きを果たしているのかを論じる。

2. ダーウィニズムの二つの顔

しばしば指摘されているように、動物愛護思想が発展した背景には、ダーウィンの進化論がある。²⁾ 熊いじめなどの動物に対する残虐行為への批判は 18 世紀に強まったが、進化論はそれに拍車をかけ、動物愛護運動は 19 世紀に大きく発展した。ダーウィンの理論が動物愛護思想と結びついたのは、

進化論においては、種の間壁は固定されたものではなく、進化という鎖によって、人間と動物は結び付いているとされたからである。伝統的キリスト教の枠組みでは、人間と動物は全く別の種として創造されたとされていたが、進化論においては、種と種は連続しているため、動物たちは人間に近い存在だと考えられるようになった。その結果、動物たちは進化の鎖でつながった人間の仲間とされ、動物愛護の思想や運動が活発になった。

ハーディは晩年に動物愛護運動に賛同したが、進化論のこの側面について極めて意識的であった。次の引用は、1909年にハーディが友人に宛てた手紙の一節であるが、反生体解剖の持論を述べる際に、進化論をその論拠としている。

The discovery of the law of evolution, which revealed that all organic creatures are of one family, shifted the centre of altruism from humanity to the whole conscious world collectively. Therefore, the practice of vivisection, which might have been defended while the belief ruled that men and animals are essentially different, has been left by that discovery without any logical argument in its favour. (*Later Years*, 138)

このように、進化論によって人間と動物が“family”であることが示されたため、進化論以前のように生体解剖を擁護することはできない、とハーディは主張している。さらに、翌年にもハーディは同様の趣旨を別の場所で述べている。ハーディは、人道主義同盟(Humanitarian League)の20周年にその機関誌に手紙を寄せたが、その中で次のように述べている。

Few people seem to perceive fully as yet that the most far-reaching consequence of the establishment of the common origin of all species is ethical; that it logically involves a readjustment of altruistic morals by enlarging as a necessity of rightness the application of what has been called 'The Golden Rule' beyond the area of mere mankind to that of the whole animal kingdom. (*Thomas Hardy's Public Voice*, 311)

ハーディが明確に述べているように、人間と動物は同じ起源をもつと示した進化論は、動物愛護思想という形をとって、“ethical”な問題を提示したのである。

上の二つの引用は、動物愛護運動に積極的に関与するようになった晩年のハーディのことばであるが、同様の思想はハーディの小説内でも見られる。例えば、*The Return of the Native*においても、自然の中でクリムが“a sense of bare equality with, and no superiority to, a single living thing under the sun” (267)を感じる場面がある。このような種の平等という認識の根底には進化論があるのだが、そのこともハーディ小説から読み取ることができる。*A Pair of Blue Eyes*には、崖から落ちそうになったナイトが三葉虫の化石と対面する有名な場面がある。崖にしがみつきながらナイトが感じることは、“He was to be with the small in his death” (214)とあるように、下等な存在である三葉虫とナイトのような人間が、死を前にして対等の立場にあるということである。ここでは皮肉な状況として描かれてはいるが、このような種の間の平等の認識には、進化論が関係している。三葉虫の化石と対面するナイトの脳裏には、太古から現在へとつながる生命の連鎖が、扇のように広がる。

Time closed up like a fan before him. He saw himself at one extremity of the years, face to face with the beginning and all the intermediate centuries simultaneously. Fierce men, clothed in the hides of beasts, and carrying, for defence and attack, huge clubs and pointed spears, rose from the rock, like the phantoms before the doomed Macbeth. They lived in hollows, woods, and mud huts – perhaps in caves of the neighbouring rocks. Behind them stood an earlier band. No man was there. Huge elephantine forms, the mastodon, the hippopotamus, the tapir, antelopes of monstrous size, the megatherium, and the myledon – all, for the moment, in juxtaposition. (214)

この場面では時間を遡り、原始の人々や恐竜の時代を幻視するのだが、重要なことは、進化の過程が扇のように繋がったものとして示されている点であ

る。つまり、人間と三葉虫は進化によってつながっているからこそ、対等なものになり得るのである。このように、ハーディの小説からも、ダーウィンの進化論が彼の動物愛護的な思想の源泉であることが確認できる。つまり、ハーディが動物愛護運動に意識的に強く賛同したのは晩年であるが、その萌芽となる考えは小説中にも散見できるのである。

しかし、進化論はハーディの動物愛護思想を強めた一方で、ハーディの悲観主義の源泉にもなった。ハーディの悲観主義と進化論の関係については多くの研究があり、自然選択によって淘汰される人々の姿や、自由意志の欠如の問題など、進化論は「個」をかえりみない残酷な自然・世界のあり方をハーディに認識させたとされている。³⁾このような悲観主義も、まぎれもなくダーウィンの影響の一側面である。そのため、小説における残酷な自然観と、動物愛護運動への賛同は、ハーディにおける自己矛盾のように思えるかもしれない。事実、自然淘汰の世界観を描いたハーディが、晩年になって動物愛護を訴えることは、同時代の人間にも意外に思えたようである。例えば、先に引用した人道主義連盟に寄せたハーディの文に対して、*Glasgow Herald* はハーディの理想主義を批判した。しかし、ハーディ自身もこのような矛盾は意識していたようである。*Glasgow Herald* の批判に対して、ハーディは下記のような反応を示している。

The remarks of *The Glasgow Herald* on my letter to *The Humanitarian* do not, I think, require any answer from me. They are merely an enlargement of my own conclusion – the difficulty of carrying out to its logical extreme the principle of equal justice to all the animal kingdom. Whatever humanity may try to do, there remains the stumbling block that nature herself is absolutely indifferent to justice, and how to instruct nature is rather a large problem. (*Thomas Hardy's Public Voice*, 312)

このように、ハーディは批判に反論しようとはせず、むしろ動物愛護の理想の困難を認めている。このことは、動物愛護運動に関与するようになって、

ハーディは自然の残酷さを強く意識していたことを示している。人間が個々の生命に愛情を注ごうとも、人間を含めた動物が生きる自然界では、「個」には無関心で、「種」が重視されている。そのため、論理的には動物はすべて平等であるが、現実にはすべてに平等であることは難しい。このような認識が、ハーディの“my own conclusion”とされているのである。

結論としては、ダーウィンの影響には二つの側面があり、ハーディにおいてはそれらが混在していると言える。ハーディ小説においては、厳しい自然という悲観主義がより色濃く、晩年においては動物愛護思想がより色濃かったものの、それは比率の問題であり、どちらの要素もハーディは持ち合わせていた。従来の研究では、自然の残酷さが注目されることが多かったが、以下では、ハーディ小説における動物愛護的な思想に焦点をあわせることにより、これら二つの側面が小説テキスト内で両立していることを示したい。

3. やさしさから殺す

ハーディ小説における進化論の二面性は、cruelty という語に注目すると、より明確に理解することができる。言うまでもなく、cruelty は動物愛護運動のキーワードである。19 世紀に発展した動物愛護運動は、基本的には動物に対する残虐行為を禁じようとする運動であり、そのことは 1824 年に設立され、1840 年にヴィクトリア女王の認可を受けた動物虐待防止協会の英語名称が、Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals であることから明らかである。つまり、動物愛護運動は、“cruelty”から動物を保護することが主眼であると言える。しかし、ハーディ小説から読み取ることができるのは、人間を含めた動物が生きる世界では、cruelty がその原理となっているという認識である。例えば、*Jude the Obscure* は、ハーディ小説の中でも動物愛護の思想がもっとも強く表れている小説であるが、その中では自然界の残酷さも強調されている。フィロットソンはジュード少年に、“Be a good boy, remember; and be kind to animals and birds, and read all you can.”(10-11)と語り、ジュードの動物愛護的な感受性の源泉となったが、そのフィロットソンも、自

然は残酷さで満ちていると考えている。彼は、“Cruelty is the law pervading all nature and society; and we can't get out of it if we would!”(318) と述べており、自然界とその延長としての人間社会は cruelty を原理としていると考えている。このような考えはスーにも見られ、“The universe, I suppose—things in general, because they are so horrid and cruel!”(221) というセリフで示されているように、自然界と人間社会どころか、宇宙そのものが cruel であると考えている。このように、*Jude* においては、cruelty から人間を含めた動物を守りたいという動物愛護的精神が描かれている一方、自然自体が cruel であるという認識も示されている。

このような皮肉な状況を象徴的に表現しているのが、ジュードによる豚の butchery であろう。ジュードが豚を屠ることができないエピソードは、小説中で繰り返し言及されるが、butchery への抵抗は、彼の動物愛護的な精神の表れである。しかし、この小説には、ジュードのやさしさを無化すること書かれている。テスのセリフに、“Oh why should Nature's law be mutual butchery!”(308) とあるように、自然界においては、butchery が常態であると指摘されているのである。このように、ハーディは、動物愛護的な精神から butchery を嫌悪するジュードを描く一方で、自然界は butchery で満ちているという、厳しい現実を提示している。つまり、動物愛護的な理想と現実の自然界（および、その一部としての人間界）というジレンマが、butchery の行為と概念によって表現されているのである。

ここまで見てきたように、ハーディの動物愛護的な思想には独自の特徴があり、動物への思いやりと、自然の残酷さの認識が混在している。この矛盾とも思える混在を最も明確に表しているのは、*Tess* と *Jude* で繰り返し描かれる、動物を思いやりながら殺す場面である。まず、*Tess* においては、猟銃で撃たれたものの絶命せず苦しみ続けている鳥たちを憐れみ、テスが自らの手で殺し、苦しみから解放する場面がある。この場面では、テスが鳥たちを “weaker fellows in Nature's teeming family”(279) としてとらえていることからわかるように、人間と動物の種を超えた愛護精神が見ることができる。し

かし、結果としてテスが行う行為は、鳥たちを自らの手で殺すという行為である。

With the impulse of a soul who could feel for kindred sufferers as much as for herself, Tess's first thought was to put the still living birds out of their torture, and to this end with her own hands she broke the necks of as many as she could find, leaving them to lie where she had found them till the game-keepers should come – as they probably would come – to look for them a second time. (279)

テスは鳥たちを彼女の同類だとみなしており、強く共感している。しかし、そのような鳥たちを苦しみから救うことができるのは、その命を絶つことによつてのみであるという厳しい現実がある。同様の場面は、*Jude* にも見られる。ある夜、動物の鳴き声を聞いたジュードは、“The faint click of the trap as dragged about by the writhing animal guided him now, and reaching the spot he struck the rabbit on the back of the neck with the side of his palm, and it stretched itself out dead.” (213) とあるように、罠にかかり苦しんでいる兎を思いやりの気持ちから自らの手で殺している。このように、*Tess* と *Jude* において、やさしさから動物を殺すというテーマが繰り返されている。これらの場面は、感情と行為の矛盾のために、非常に印象的なものとなっているが、ハーディが抱える動物愛護の理想と現実というジレンマも、体现されているのである。

4. ハーディ的動物愛護の背景

ここまで見てきたように、ハーディ小説では、動物愛護の理想が掲げられるだけでなく、自然の残酷も描かれている。このような二面性の背景には、一つには、先に指摘したように、ダーウィンの影響の二面性がある。ダーウィンの理論は、動物と人間は進化によつてつながった家族であるという考え方と、生命が淘汰される残酷な自然観という、二つの方向性をもたらした。

この両者がハーディの中で併存しており、やさしさから動物を殺す場面は、それを端的に示している。

また、ハーディにおいては、進化によって動物と人間はつながっているという考え自体も、悲観的にとらえられる場合がある。なぜなら、動物と人間の連続性を認識することは、人間も結局は動物に過ぎず、本能という生物学的な仕組みによって支配されており、人間の自由意思と呼ばれるものも幻想にすぎない、という考えにつながるからである。例えば、*Jude* においては、人間に潜む動物性を取り上げられている。アラベラは動物的な女性として描かれており、ジュードもしばしば動物的な衝動を抑えることができない。つまり、*Jude* においては、動物を仲間として思いやる一方、人間も動物の一種にすぎないという考えも見られ、動物を愛玩対象として理想化するような動物愛護からは、距離を取っていると言える。

動物を単純に理想化しないことは、ハーディの動物観の特徴であるが、その背景には、ハーディが都市部出身ではないという事実もあるだろう。動物愛護運動は基本的には都市の現象であり、Berger が指摘するように、19 世紀に動物への関心が高まった一因としては、都市化によって動物たちが人々の生活空間から消滅したことがあげられる。産業化で動物たちの姿が見えなくなる中で、1847 年に Regent's Park にイギリスで最初の公共の動物園が誕生し、中産階級の間でペットを飼うことが流行し、動物の絵柄のおもちゃが大量に生産された(20-24)。動物園の動物、ペット、動物の模様、これらに共通するのは動物性の抑圧である。つまり、リアルな動物たちが生活空間から消える一方で、動物の野生的な部分を取り除き、かわいらしく擬人化された動物たちのイメージが流通することになったのである。当時の動物が登場する物語を見ても、動物性の抑圧は明らかであり、*Peter Rabbit* や *Black Beauty* のように、この時代の動物物語の動物たちは、「人間以上に人間的」である(Lansbury, 180)。ペットのように動物性を抑圧された動物たちは、Danahay によると、ダーウィンの厳しい生存競争の場という自然観が喚起する残酷さとは対極的なものとして受け取られ、動物の暴力性から目をそらす役割があ

った。

当時の動物愛護運動をめぐる全体的な状況は、以上のようにまとめることができるが、ハーディの場合は事情が若干異なる。ハーディの小説世界には、擬人化された動物よりも、*Tess* の農場生活で描かれているように、リアルな動物であふれている。たしかに、ハーディ小説にはパストラル的な要素があり、動物の動物性が薄められ、都市部の中産階級の読者に心地良い動物描写になっている面も否定できない。しかし、ハーディは農村のリアリティもしっかりと描いている。例えば、*Tess* において、収穫の際にネズミなどの小動物を一網打尽にする場面がある。刈り取り機によって穀物が刈り込まれていき、逃げ場を失った動物たちが農夫たちに殺されるという、パストラル的ではない、残酷とも受け取れる農村の様子が描かれている。さらに、*Jude* においては、先ほど取り上げたように、豚の *butchery* という生々しい光景が見られる。他にも、アラベラが去勢豚の局部をジュードに投げつける場面もあり、そこでは豚の局部が靴磨きに用いられるという情報までつけ加えられている。このように、ハーディ小説においては、ダーウィンの適者生存の厳しい自然観だけでなく、農村における残酷とも言える人間と動物のリアリティも描かれており、リアルな動物への近さも、ハーディ小説の特徴だと言える。このような形で動物をよく知っているために、ハーディの動物愛護的な思想には、理想主義だけではなく、その理想の難しさも含まれることになるのである。

5. 共感の構図

上では、ハーディの動物愛護思想の特徴を当時のコンテキストとの関係において論じたが、以下では、ハーディ流の動物愛護を小説テキストとの関係において分析したい。*Tess* と *Jude* においては、動物愛護の精神は、主人公と動物の共感という形で繰り返し描かれている。このような共感の場面は、小説テキストの中で、どのような機能を果たしているのだろうか。

先に論じたように、*Tess* と *Jude* においては、思いやりから殺すという行

為が重要なテーマになっているが、これらの場面で重要なことは、登場人物が動物に強く共感し、同一化している点である。*Tess* における撃たれた鳥たちは、“impure”の烙印を押され、苦しみながら生きるテスの境遇に呼応している。また、*Jude* における罠にかかった兎も、因習的な社会におけるジュードやスーの苦しみを代弁している。*Jude* においては、“trap”という語が頻繁に用いられており、スーのセリフに“an institution legal marriage is – a sort of trap to catch a man”(271)とあるように、結婚制度が一種の“trap”であるという見解が示されている。そのため、罠にかかった兎は、結婚制度という罠のために苦しめられるジュードとスーの姿に呼応していると言える。このように、思いやりを持って殺す場面は、登場人物の苦境を動物の苦しみに重ね合わせて表現している。

ハーディの場合、動物との共感で強調されるのは「苦しみ」や「つらさ」である。このことは、思いやりから動物を殺す場面だけではなく、他の場面にも当てはまる。例えば、ジュード少年が鳥たちを追い払うのをやめ、エサを食べさせる有名な場面は、以下のようなことばで描かれている。

He sounded the clacker till his arm ached, and at length his heart grew sympathetic with the birds' thwarted desires. They seemed, like himself, to be living in a world which did not want them. Why should he frighten them away? They took upon more and more the aspect of gentle friends and pensioners – the only friends he could claim as being in the least degree interested in him, for his aunt had often told him that she was not. He ceased his rattling, and they alighted anew. [...]

They stayed and ate, inky spots on the nut-brown soil, and Jude enjoyed their appetite. A magic thread of fellow-feeling united his own life with theirs. Puny and sorry as those lives were, they much resembled his own. (15)

ジュードは、望まれない存在である鳥が自分に似ていると考え、鳥たちに“sympathetic”になり、彼らが“only friends”であると感じている。そして、“fellow-feeling”を抱きながら、鳥と自らの姿を重ね合わせる。鳥たちの姿は、ジュード少年の家庭環境に対応しているだけではない。望みが満たされない

鳥たちの姿は、大学で学ぶ夢がかなえられない彼の人生とも呼応している。

このように、登場人物の動物との共感、彼らの苦しみを強調するのだが、ハーディ小説において興味深いのは、Lansbury も指摘するように、共感する能力自体も、苦しみの原因とされている点である(38)。少年時代のジュードは、切られる木を見ては、木が痛がっているように感じ、ミミズを一匹たりとも踏みつぶさないように家に帰る。さらには、大人になったジュードも、豚を正しく屠ることができない。このような、豚やミミズを殺せない性格は、小説内で繰り返し言及される彼の重要な特徴である。そして、それがジュードの「弱さ」とされている。

This weakness of character, as it may be called, suggested that he was the sort of man who was born to ache a good deal before the fall of the curtain upon his unnecessary life should signify that all was well with him again.
(17)

ジュードの動物への共感、彼の道徳的な正しさを表すというよりは、彼の苦しみに満ちた人生を暗示するものとして描かれているのである。

Tess においても、動物と共感することができるテスは、苦しみの人生を強いられる。テスは馬のプリンスにも愛情を注いでいるが、彼女の運命はプリンスの悲惨な最期とも重ね合わされている(Lansbury 108-109)。動物と共感するテスが苦しみの人生を送るのに対して、その原因であるアレクは動物を酷使する人間として描かれている。アレクの描写においては、彼が馬を強引に操り、服従させる様子が強調されているが、テスに関係を迫る場面においても、アレクは繰り返し猛スピードで馬を走らせ、テスに恐怖感を与えている。このことは、アレクにとっても、テスが馬と同一化しているということを示している。馬の主人が抵抗する馬を鞭打ち、服従させるのと同様に、アレクは抵抗するテスを服従させ、支配下に置こうとする。Lansbury によると、ヴィクトリア朝のポルノグラフィにおいて繰り返し現れた性的なファンタジー

には、反抗的な女性を鞭打ち服従させるというものがある(96-111)。つまり、馬の支配と女性の支配は当時の性的なファンタジーの中では混ざり合っていたのである。*Tess* にもこの傾向が見られ、アレクにとっては、テスの支配と馬の支配は混ざり合っている。テスが馬と一体化することによって示されるのは、彼女もまた支配され、虐げられる立場だということである。⁹⁾

このように、ハーディ小説においては、動物の苦しみに共感する人間は賛美されるどころか、不幸な人生を強いられている。この点は同時代のコンテキストを考えると奇妙なことのようと思われる。なぜなら、当時の言説においては、動物への思いやりの強さは、道徳的、階級的、進化論的に優れていることの証左であったからだ。Ritvo が言うように、動物を思いやることのできる人間は、道徳的に優れているとされ、階級という点でも、動物虐待は労働者階級の特徴とみなされたため、階級的に上位の人間は動物に共感する能力が高いとされた(125-166)。さらには、White によると、当時の進化論の言説において、共感する能力は、知的能力の中で上位におかれていた(68-70)。ダーウィンも共感する能力は自然選択によって進化したと考えており、*The Descent of Man* において、“sympathy and the love of his fellows”などの他者を愛し、他者と自らを重ね合わせる能力は、“the higher mental qualities”(84)であると述べている。そのため、Bending によると、当時の社会においては、他者の痛みに関心できるかどうかによって、文明化の度合いがわかるとされた(123-135)。野蛮人は肉体的にも精神的にも痛みに関心で鈍感であり、他人の痛みにも共感できないとされたのに対して、文明的な人間は痛みに対する感受性が高く、共感する能力も高いと考えられた。このように、当時のコンテキストにおいては、動物に関心できる人間は道徳的、階級的、進化論的に優れているとされたのである。そのような文化的背景を踏まえると、動物に関心する登場人物こそが苦しめられる状況は、ハーディに特徴的な表現方法であると言える。動物愛護のわかりやすい教訓は、ホガースの『残酷の四段階』のように、動物を虐待する子供は、大人になると人間を殺して死刑になり、あるいは、グリム童話のように、動物に優しくすると報われるというもの

ある。⁹しかし、ハーディ小説の中では、アレクのような人物が恵まれた地位にいるのに対して、テスやジュードのような人物が苦しめられている。なぜハーディはこのような状況を描いたのだろうか。

この点を考えるには、同時代に流行していた動物物語が参考になるだろう。Cosslett によると人間の言葉を話す動物が出てくる物語ジャンルは 18 世紀半ばに始まり、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて子供向けのジャンルとして確立されていったが、その過程の中で、19 世紀に流行したものの中に「動物の自伝」がある(63)。その中で一番有名な例が、アンナ・シュウエルの *Black Beauty* である。このようなジャンルがハーディの同時代に流行したのだが、Cosslett によると、「動物の自伝」という物語ジャンルの特徴には、進化論的な序列を転覆する効果がある(63-92)。なぜなら、進化の序列において下位に位置する動物の目線から人間社会を見ることにより、バフチンがカーニバレスクと呼ぶ状況が起こることになるからである。カーニバルにおいて王様が乞食になり、乞食が王様になるように、カーニバレスクは既存の秩序の逆転状態を指すが、これを *Black Beauty* に当てはめると、虐げられている馬の目線から人間たちを見ることにより、通常は低い地位にある馬が気高い主人公となり、逆に動物を酷使する人間は批判にさらされるという序列の転倒が生じていると言える。

このような秩序の転覆は、ハーディ小説の動物描写においても見られ、その際に、登場人物の動物との共感が、非常に重要な役割を果たしている。先ほど指摘したように、テスやジュードは、鳥や兎、さらにはミミズとさえも、共感を通して同一化する。彼らは人間という種であるため、進化の上では、動物よりも高い地位にいるが、動物たちに共感することで、彼らは動物たちと同じ立場まで下りていき、逆に、これらの動物たちは、人間と同じ地位にまで高められる。このように、共感という通路によって、人間と動物の上下関係が無化されるのである。

さらに、小説テキスト内で登場人物が動物に共感するのに加え、そのメタ・レベルには、登場人物に共感する「読者」が存在している。テスやジ

ユードが苦しむ動物たちに共感するように、ハーディ小説の読者は、苦しんでいるテスやジュードに共感する。その結果、前述の秩序転覆の効果は、このメタ・レベルでも生じることになる。なぜなら、登場人物が動物と共感することによって、進化における上下関係が転覆されるのと同様に、読者が登場人物に共感することによって、人間の世界における階級的・ジェンダー的な上下関係にも疑問が呈されるからだ。ハーディの登場人物は、しばしばジェンダー的・階級的な序列においては底辺に位置している。テスは impure な女性として人間社会の底辺へと転落し、ジュードは労働者階級であるがゆえに大学に受け入れられない。ハーディ小説の読者層は基本的に中産階級だと考えられ、登場人物よりも高い地位にいるが、ハーディ小説を通して、社会的に低い地位にいる人物の苦しみに共感することになる。そして、*Black Beauty* の読者が苦役を強いられる馬たちに共感することによって、人間と動物の進化論的な上下関係が転覆されたのと同様に、ハーディ小説においても、読者が登場人物に共感し、下層部から社会を見ることによって、社会における序列の理不尽さに気づくことになる。⁹⁾ さらに、動物に共感する登場人物が苦しむ一方で、動物を粗雑に扱い、さらには人間を動物のように扱うアレクのような人物が社会的に高い地位を得ていることに憤りを覚える。

このように、ハーディ小説における共感の構図は、動物―登場人物―読者の三者の間で入れ子構造になっている。動物と登場人物の共感では、進化の上での序列が無化され、登場人物と読者の共感では、階級的・ジェンダー的な上下関係が転覆されることになる。つまり、ハーディ小説における動物描写は、二つのレベルにおいて既存の秩序を転覆させる効果を生み出すのである。

6. 結論

本論では、ハーディの動物愛護精神の特徴を示し、それが *Tess* と *Jude* において、どのような機能を果たしているのかを論じた。ハーディは動物愛護運動に賛同したが、ハーディの動物愛護精神は、相反する要素が結び付いて

形成されている。ダーウィンの影響という点でも、ハーディが受けた影響には二つの方向性がある。一つは、自然淘汰の世界において、人間も含めた動物が生存のために争う厳しい自然観である。もう一つは、進化の鎖によって種はつながっており、動物と人間は一つの家族だという動物愛護的な考え方である。そして、このような二面性を最も明確に示すのが、テスとジュードが、苦しんでいる動物を共感しながら殺す場面である。

また、ハーディの小説における動物描写の重要な特徴は、登場人物が動物に共感し、同一化している点である。そして、共感を通して、既存の秩序を転覆する効果がもたらされている。*Tess* や *Jude* では、登場人物が動物に共感し、読者が登場人物に共感するため、動物―登場人物―読者の三者の間で入れ子構造の共感の構図が成立している。この二重の共感を通して、読者は生物学的な下層部と社会的な下層部から世界を見ることになり、生命の平等が訴えられると同時に、社会のあり方に異議が申し立てられている。このような形で、ハーディの動物愛護の精神は社会批判へとつながっているのである。

(注)

本稿は日本ハーディ協会第54回大会（於、中央大学多摩キャンパス、2011年10月29日）における口頭発表原稿を加筆、修正したものである。

1) この点について、本格的な議論はまだほとんどされていないが、金子がハーディの動物愛護運動への関心に注目し、事実関係をまとめている。

2) 動物愛護運動の展開とその背景については、Thomas, Turner, Ritvo を参照。

3) ダーウィンとの関係でハーディを論じたものとしては、Goode, Beer, Meisel の論などがある。

4) 馬の支配とセクシャリティの関係については、Michie も参照。*Tess* における馬の問題も論じられている。

5) 動物虐待と道徳の関係については、Cartmill, 53 も参照。

6) 動物愛護運動において、階級の問題が噴出した事例として、1907年の Brown Dog Riots がある。

生体解剖で苦しめられ、命を奪われる動物たちに労働者が同情し、それが暴力事件に発展したのだが、そこには社会的に抑圧されている労働者が、富や権力を体現する医師によって苦しめられる動物たちと、自分たちの姿を重ね合わせたという側面がある。Brown Dog Riots に関しては、Lansbury と Kalof, 137-140 を参照。

引用文献

- Beer, Gillian. *Darwin's Plot: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth Century Fiction*. London: Routledge and Kegan Paul, 1983.
- Bending, Lucy. *The Representation of Bodily Pain in Late Nineteenth-Century English Culture*. New York: Oxford University Press, 2000.
- Berger, John. *About Looking*. New York: Vintage Books, 1991.
- Cartmill, Matt. *A View to a Death in the Morning: Hunting and Nature through History*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1996.
- Cosslett, Tess. *Talking Animals in British Children's Fiction, 1786-1914*. Aldershot: Ashgate, 2006.
- Danahay, Martin A.. "Nature Red in Hoof and Paw: Domestic Animals and Violence in Victorian Art." *Victorian Animal Dreams: Representations of Animals in Victorian Literature and Culture*. Eds. Deborah Denenholz Morse and Martin A. Danahay. Surrey: Ashgate, 2007: 97-120.
- Darwin, Charles. *The Descent of Man*. London: Penguin, 2004.
- Goode, John. *Thomas Hardy: the Offensive Truth*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Hardy, Florence Emily. *The Later Years of Thomas Hardy, 1892-1928*. Cambridge: Cambridge University Press, 2011.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. London: Penguin, 1998.
- . *A Pair of Blue Eyes*. London: Penguin, 1998.
- . *The Return of the Native*. London: Penguin, 1985.
- . *Tess of the D'Urbervilles*. London: Penguin, 1998.
- Kalof, Linda. *Looking at Animals in Human History*. London: Reaktion Books, 2007.
- Lansbury, Coral. *The Old Brown Dog: Women, Workers, and Vivisection in Edwardian England*. Madison, Wis.:

University of Wisconsin Press, 1985.

Meisel, Perry. *Thomas Hardy: the Return of the Repressed*. New Haven: Yale University Press, 1972.

Michie, Elsie B.. "Horses and Sexual/ Social Dominance." *Victorian Animal Dreams: Representations of Animals in Victorian Literature and Culture*. Eds. Deborah Denenholz Morse and Martin A. Danahay. Surrey: Ashgate, 2007: 145-166.

Millgate, Michael. *Thomas Hardy's Public Voice: the Essays, Speeches, and Miscellaneous Prose*. Oxford : Oxford University Press, 2001.

Ritvo, Harriet. *The Animal Estate: the English and Other Creatures in the Victorian Age*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1987.

Sewell, Anna. *Black Beauty*. Oxford: Oxford University Press, 1992.

Thomas, Keith. *Man and the Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800*. Harmondsworth : Penguin, 1984.

Turner, James. *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind*. Baltimore : Johns Hopkins University Press, 1980.

White, Paul S.. "The Experimental Animal in Victorian Britain." *Thinking with Animals: New Perspectives on Anthropomorphism*. Eds. Lorraine Daston and Gregg Mitman. New York: Columbia University Press, 2005.

金子幸男 「ハーディと動物愛護」日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』音羽鶴見書店、2007年 68-69 頁

『微熱の人』と大英帝国—ポストコロニアル批評で 読むトマス・ハーディ

坂 田 薫 子

序—当世風小説としての『微熱の人』

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の『微熱の人、あるいはド・スタンシー家の城—現代小説』(*A Laodicean; or, The Castle of the De Stancys: A Story of To-day*, 1881) は、研究書で章を割かれて論じられることは稀で、ハーディ小説の批評史において高い地位を占めることはないと言っても過言ではない。しかし、この小説は、掲げられたその副題「現代小説」が示す通り、出版当時のイギリス・ヴィクトリア朝社会の様々な話題を写し出している。鉄道の普及、電信技術の発展、写真技術の登場などの産業革命がもたらした恩恵と弊害、「新しい女」ポーラ・パワー (Paula Power) 描写に見られる新しい性科学への興味、新人類の抱える、“Laodiceanism” とでも呼ぶべき現代病描写に見られる新しい心理学への興味、ジョン・ラスキン (John Ruskin)、ウォルター・ペイター (Walter Pater) の芸術論へと繋がる建築の修復問題への提言、新興階級の台頭が生む階級問題や宗教問題へのマシュー・アーノルド (Matthew Arnold) 風の提言など、後期ヴィクトリア朝小説を論じるときに頻繁に取り上げられる一連の問題意識を一度に垣間見ることができる。

一方でこの小説は、時勢を写し出す話題を盛りだくさんに詰め込みすぎて、却って統一感に欠け、その結果、主題のはっきりしない作品として、批評史の中で隅へと追いやられているのも否定できない事実だが、他方で、ハーディが自分の生きた時代、社会の現状に実に敏感に反応していたことをうかがわせ、大変興味深い。特に『微熱の人』には帝国主義特有のイデオロギ

ーを読み取ることが可能で、エドワード・サイード (Edward W. Said) の『オリエンタリズム』(Orientalism, 1978) や『文化と帝国主義』(Culture and Imperialism, 1993) によって、1970 年代以降、これだけ文学批評理論の一つとして主流となったにもかかわらず、ハーディ作品理解には思ったほど利用されることのないポストコロニアル批評で分析することができる。そこで本論文では、ハーディのマイナー小説『微熱の人』を、ポストコロニアル批評を用いて分析し、この作品から読み取ることができる後期ヴィクトリア朝の帝国主義的イデオロギーを明らかにした上で、この小説の「現代小説」性を考えてみたいと思う。

1. イギリス小説のキャンノンと大英帝国

十九世紀後半のイギリスは、もうそれほど遠い未来ではなくなってしまった大英帝国の終焉に直面する覚悟を決めることを余儀なくされていた。他の欧米諸国との経済上の競争における劣勢と、植民地での民族運動の高まりを容易に鎮圧できなくなった苛立ちから生じる二重のプレッシャーの下、イギリス国民は、チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の進化論から派生した退行理論に助長され、自分たちは帝国を形成する人種としては不適当なのではないか、自分たちは人種として衰退しているのではないかという不安を日増しにつのらせていた。インドの反乱に始まり、ボーア戦争での屈辱に至るまでの植民地でのイギリスの経験は、衰退する国家、権力の座から滑り落ちていく国家としてのイギリス像を、まさにイギリス国民の鼻先に突き付け続ける役割を果たしていたのである。

そうした中、ヴィクトリア朝の人々が、自分たちを劣った人種へと退行させている原因探しに躍起になったとき、イギリス白人男性は、植民地での現地の文化や現地人との接触によって、本来優れていたはずの道德観を退行させてしまっているのではないか、という考え方に恐怖心を抱くことになる。文学作品の中では、イギリス白人男性が、現地のプランテーションを所有す

る植民者、植民地との取引を行う商人、イギリス軍駐屯地に滞在する軍人、植民地のイギリス政府の役人など、様々な立場から植民地で生活をするうちに、イギリスとは異なる現地の気候や文化に悪影響を受け、イギリス人らしい美德を失い、現地の劣った道徳観に染まっていってしまう様子が描かれた。そのもっとも有名な代表例が、コンラッド (Joseph Conrad) の『闇の奥』 (*Heart of Darkness*, 1902) に登場するクルツ (Kurtz) である。¹⁾

さらに、帝国主義のイデオロギーが見え隠れする文学作品では、イギリス人が植民地で吸収した悪徳を本国に持ち帰り、今度はイギリス本土の人間を腐敗させていってしまうのではないかという恐怖が描写された。こうした文学作品の主人公が直面しなければならない脅威は、大抵の場合、植民地帰りのイギリス人によってもたらされることになっている。例えば『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) では、ロチェスター (Edward Rochester) とバーサ (Bertha Mason Rochester) がジェインに脅威を与え、『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) では、ヒースクリフ (Heathcliff) がアーンショー (Earnshaw) 家とリントン (Linton) 家に脅威をもたらす。²⁾

ハーディの『微熱の人』にも、以上のような植民地文学の構図を読み取ることができる。この作品のヒーロー、ジョージ・サマーセット (George Somerset) とヒロイン、ポーラ・パワーを苦しめるのは、植民地駐在から帰国した陸軍軍人ウィリアム・ド・スタンシー大尉 (Captain William De Stancy) と、植民地とのグアノ取引貿易で財を成したアブナー・パワー (Abner Power) であり、また、ド・スタンシー大尉をそそのかし、ポーラの人生を狂わせようと画策するのは、植民地生まれの、それも現地人の血を半分受け継いでいる可能性のあるウィリアム・デア (William Dare) である。大英帝国の植民地から戻ってきた人物がヒーロー、ヒロインを苦しめるという展開は、他のハーディ小説にはほとんど見られず、『微熱の人』をハーディには特異なコロニアル小説として読む可能性を示唆している。それでは、実際に、三名の登場人物について詳しく分析してみよう。

2. 大英帝国軍人の帰国がもたらす脅威³⁾

2. 1. ド・スタンシー大尉の現地人化

まずは、本来大英帝国を守るべき軍人の退行への恐怖がド・スタンシー大尉の現地人化に表現されている可能性について考えてみる。ド・スタンシー大尉の不道德観は、女好き、アルコール中毒、喫煙、賭け事の習慣といった快楽主義によって随所に示されている。ここに階級問題を読み取ろうとすれば、准男爵家の末裔であるド・スタンシー大尉の道德観は、彼が帰属している上流階級の没落を象徴する目的で退行していくと解釈されるが、ここに上述のポストコロニアル批評を当てはめれば、ド・スタンシー大尉は軍人として植民地に駐屯した経験によって、イギリス人の美德を失っていったと考えられる。特に、彼の駐屯先であり、デアの出生地である可能性の高い場所がインドとされている点（133, 165, 265）は示唆的である。なぜならば、大英帝国の植民地インドは当時、イギリス人を退行させる場所と考えられていたからである。⁴⁾

ド・スタンシー大尉が何をきっかけに植民地インドで墮落していくことになったのかは、ストラー（Ann Laura Stoler）の分析にヒントがある。

Métissage generally and concubinage in particular were viewed as dangers to racial purity and cultural securing of racial identity. Through sexual contact with native women, European men "contracted" disease as well as debased sentiments, immoral proclivities, and extreme susceptibility to uncivilized states. (Stoler 67-68)

このストラーの分析を引用し、マックリントック（Anne McClintock）も論じているように、十九世紀ヴィクトリア朝は、植民地での現地女性との性的接触に、イギリス白人男性の道德的逸脱の原因を見出していた：“women's sexuality, was cordoned off as the central transmitter of racial and hence cultural contagion”（McClintock 47）。『ジェイン・エア』のロチェスターの退

行の原因を分析するトマス (Sue Thomas 40-41) も、クレオール女性バーサとの性的接触によって、彼女の道徳的退廃がロチェスターに伝染したと論じている。ド・スタンシー大尉が駐屯地で関係を持った女性が、現地に滞在していたイギリス白人女性なのか、現地生まれのイギリス白人女性なのか、あるいは現地人女性なのかはテキストでは明記されていないが、彼女と正式な結婚を執り行っていないこと、そして彼女との間に生まれた息子デアを嫡出子として公認していないことから、相手の女性は植民地の現地人女性であった可能性が高い (坂田 9)。⁵⁾ となると、大英帝国のイデオロギーに準拠すれば、ド・スタンシー大尉の道徳的退廃も、ロチェスターの場合と酷似して、植民地の現地人女性との性関係をきっかけに引き起こされたことになっていると想像することができる。

そもそもド・スタンシー家がスタンシー・カースル (Stancy Castle) を失った原因が、ド・スタンシー大尉の父親サー・ウィリアム (Sir William De Stancy) の賭け事による借金であることから、ド・スタンシー家の賭け事好きは遺伝的なものとして描かれていることは確かである。一家の在り様が特定の階級の表象として提示されていると解釈すれば、ド・スタンシー家の賭け事好きは、退廃した上流階級の快樂主義を写し出そうとしているということになるだろう。しかし、たとえド・スタンシー大尉の快樂主義が遺伝的なものであろうとも、彼に、彼がデアの母親との決別以来守ってきた禁酒と女性の魅力への抵抗への誓いを破らせ、再び彼を墮落の道へと誘惑するのが、デアであることは注目に値する : **"Dare, who, having at last broken down the barrier which De Stancy had erected round his heart for so many years"**(157)。イギリスに戻ったド・スタンシー大尉に英国性を取り戻させることを妨げたものとは、息子デアによって具象化された、ド・スタンシー大尉の植民地での経験なのである : **"the graceless lad Dare—the obtrusive memento of a shadowy period in De Stancy's youth, who threatened to be the curse of his old age."** (157)。

ド・スタンシー大尉は、デアやアブナーのように、何らかの策略を胸に

本国イギリスに帰国したわけではない。彼自身は自分が無気力で、憂鬱な気分に苛まれ続けているのは、植民地を転々としていたことに原因があると考え、イギリス本国に戻った今こそ、若さを取り戻せるはずであると期待している：“I ought to grow a youth again, like the rest, now I am in my native air.”(133)。5巻2章には、彼がポーラに惹かれた理由は、自らの過去、これまでの自分自身から逃避したいためであることがほのめかされている。

De Stancy was beginning to cultivate the passion of love even more as an escape from the gloomy relations of his life than as matrimonial strategy. Paula's juxtaposition had the attribute of making him forget everything in his own history..., and when he conjectured that she might really learn to love him he felt exalted in his own eyes and purified from the dross of his former life. (268-69)

彼の植民地での女性経験は、ポーラの中に健全で瑞々しい「イングリッシュネス」(“the healthful sprightliness of an English girl,” 152)を見出させ、彼女のイギリス人女性らしい健康美こそが、自らが植民地での経験で失ってしまった英国性を取り戻させてくれるような錯覚に陥らせたのかもしれない。しかし、物語の最後で、スタンシー・カースルは焼け落ちてでも、おそらくデアは生き残っていることがほのめかされている。古くはカントリーハウス・ポエムが著された頃から、カントリーハウスは文学作品において英国性を象徴する役割を担ってきた。⁶⁾ この結末は、ド・スタンシー大尉の英国性は失われたまま、回復されることはない一方で、デアによって具象化された、ド・スタンシー大尉の植民地での経験は消えることはないことを示しているのかもしれない。

2. 2. 植民地生まれのデアの国籍不詳性

ド・スタンシー大尉の植民地での経験を具象化するデアの退行の度合は、ド・スタンシー家の遺伝的悪徳である賭け事好きや、父親譲りの飲酒癖と喫煙の習慣からだけでなく、彼の不正の数々にも見て取れるようになっている。

デアは、盗み聞き、不法侵入、ゆすり、盗み、殺人の脅迫など、考えつく限りの不正を働く。デアの危険度は、ド・スタンシー大尉を凌駕しており、彼がポーラとサマーセットに与える悪影響は計り知れない。

2. 1. で、ド・スタンシー大尉が関係を持った駐屯地の女性は現地人である可能性が高く、彼の退行の原因を植民地女性のセクシュアリティとの接触到読み取る可能性を示唆したが、二人の間に生まれたデアの退行の原因もまた、彼の母親の人種、出身地に見出すことが可能である（坂田 10）。前述のストラーの引用は、さらに次のように続く。

Concubinage became the source of individual breakdown, racial degeneration, and political unrest. Children born of these unions were “the fruits of a regrettable weakness,” physically marked and morally marred with “the defaults and mediocre qualities of their mothers.” (Stoler 68)

こうした理由から、『嵐が丘』のヒースクリフを植民地出身の肌の色の異なる部外者と見なすスネイダーン（Maja-Lisa von Sneidern 184）も、ひ弱で覇気のないリントン・ヒースクリフ（Linton Heathcliff）に、混血児に対する当時の人種的差別を読み取っている。しかし他方で、ヴィクトリア朝の帝国主義的イデオロギーに従えば、デアの退行の原因を、彼の母親の人種、出身地とは無関係に、彼自身が植民地で生まれ育ったという事実のみに帰するすこともできる。⁷⁾

コレラがいかにしてインド特有の病気と位置付けられていったかを分析したギルバート（Pamela K. Gilbert）の考察を利用すれば、デアは植民地インドで生まれ育ったことで、既に「イングリッシュネス」を持ち合わせていないということになる。

[R]ace, for Victorian thinkers, was more mutable and less tied to a biologically essentialist view than it has been in popular twentieth-century thought—geography was thought to have physical

effects that were definable as racial—which is why Indian-born English children were often thought to be not quite English.... Race was tied to the geography.... (Gilbert 112)

事実、周囲の者が、デアは人種上の混血児かもしれないことを問題視しているような描写はテキスト内には存在しない。物語の中で彼を観察する本国イギリス人の目に異質に映るのは、つまり、テキストで強調されているのは、彼の肌の色や人種ではなく、彼のコスモポリタン性と無国籍性である。例えばデアに初めて会ったとき、サマーセットは、「君はイギリス人ではないんだね」(“You are not an Englishman, then,”46)と彼に話しかけている。デアは、その父親が生粋のイギリス人であろうと、その出生の地がインドであるという事実から、その「イングリッシュネス」を否定され、言わば無国籍の「帝国の落とし子」として扱われていることがうかがえる。

帝国の落とし子としてのデアは、その出生地、インドだけではなく、大英帝国の植民地全体の表象となる。1巻6章(46)でデアが自分の住んだことのある国々として挙げる場所、インド、カナダ、そして注(390)にあるように、原稿の段階のオーストラリアも、すべて大英帝国の植民地である。また1巻8章(62)で人々がデアの国籍として挙げる、カナダ人、東インド人、そして注(394)にあるように、原稿の段階のオーストラリア人も、どれも植民地のそれである。そう考えると、デアが父親とポーラの結婚に固執する理由、「できれば法的に認めてもらい、お金持ちにしてみたい」

(“the possible legitimation and enrichment of himself,” 146)に違った解釈を加えることが可能になる。文字通りに解釈すれば、デアは、父親とポーラと結婚させることで、父をお金持ちにし、スタンシー・カースルなどの遺産を取り戻させた後、自分がド・スタンシー大尉の私生児であることを公表し、ド・スタンシー家の正当な第一後継者となることを目的としているととらえることができる。しかしここで、現地人女性との間に生まれた子どもを、父親の血を受け継ぐヨーロッパ人と見なすべきなのか、母親の血を引く現地人と

見なすべきなのか、当時混血児が曖昧な地位しか与えられていなかった事実を考慮に入れると、デアの要求は違ったニュアンスを持つ。

[Concubinage] also involved children—many more than official statistics revealed—and questions of who was to be acknowledged as a European and who was not. Concubine children posed a classificatory problem, impinging on political security and white prestige. The majority were not recognized by their fathers, nor were they reabsorbed into local communities as authorities often claimed. (Stoler 68)

デアの要求は、自らをヨーロッパ白人として法的に認めて（“legitimation”）もらい、自分のアイデンティティを向上して（“enrichment”）ほしいという混血児たちの訴えの代弁としてとらえることができる。そう考えると、さらに、彼の要求は大英帝国の植民地そのものの要求の代弁にもなり得、彼の姿に、植民地がイギリス本国に、正当な権利と金銭的な補償を求めている姿を重ねることさえ可能になってくる。そうした解釈を認めると、デアがイギリスにもたらそうとしている脅威は、ド・スタンシー大尉の脅威よりも複雑で、根が深いものであることがうかがえる。

3. 植民地商人の帰国がもたらす脅威

次に、ド・スタンシー親子とともに、ポーラとサマーセットを苦しめる商人アブナー・パワーを当時の帝国主義的イデオロギーと照らし合わせながら分析してみる。まず、アブナーと植民地の関係について明らかにする必要があるだろう。5巻11章から、アブナーを豪商にまで成長させた儲け先はペルーであり、彼が扱っていた取引物はグアノであることが読み取れる。十九世紀、ペルーはグアノの産地として有名だったため、アブナーがペルーを本拠地としてグアノで商売をしていたという設定は時代に合っている。また、グアノは火薬にも用いられていたもので、アブナーがグアノで商売を始めるようになったのは、爆弾作りを生業としていたためと考えることが可能となり、

彼がヨーロッパのアナーキストたちの片腕として働いていたという設定にも無理がない。当時、グアノ採掘のために、多くの奴隷が用いられていたという史実から、アブナーと植民地主義が結びつくようになっている。作品中、アブナーはペルー、オーストラリア、カリフォルニアを「富を産出する場所」(“wealth-producing places,” 325)と呼んでいるが、ポストコロニアル批評で『微熱の人』を読み解くと、ド・スタンシー大尉とデアが十九世紀ヴィクトリア朝の軍事面での植民地主義を垣間見させているとすれば、アブナーのグアノ・トレードは十九世紀ヴィクトリア朝の産業・商業面での植民地主義を垣間見させる役割を担っていると解釈できるようになっている。

それでは、アブナーの退行の原因について考えてみよう。少し時代をさかのぼるが、ロマン派時代、天候がその国の政府、礼儀作法、モラルに及ぼす影響について論じた十八世紀の啓蒙主義時代の思想家、モンテスキュー(Charles de Secondat, Baron de Montesquieu)の著書、『法の精神』(*The Spirit of the Laws*, 1748)の理論をもとに、プロウガム卿(Lord Henry Brougham)はその著作(*An Inquiry into the Colonial Policy of the European Powers*, 1803)で、植民地で長く暮らしたイギリス人の帰国を危険視していた。ネクトマン(Tillman W. Nechtman)の研究書の第一章の分析に詳しいように、十八世紀、インドから帰国した東インド会社の従業員、蔑称「ネイボップ」(“nabob”)が本国で偏見と戦わざるを得なかったのもそのためである。これが『微熱の人』の舞台であるヴィクトリア朝時代になると、さらに、植民地特有の病気にかかりやすいイギリス人は、現地人化、東洋人化もしやすいと信じられ、ヨーロッパ、そしてイギリス本国にとって危険な人物ととらえられるようになる。十九世紀、インド特有の病気と考えられたコレラにかかったイギリス人がどのように捕らえられていたかに関する、次のギルバートの考察が参考になる。

[T]hose Britons who succumbed to the disease and became its vectors were seen as subject to alien invasion, Easternized, not only by the

disease but by vulnerability to it; in some sense, they were racial traitors through their orientalized bodies, which were culpably made so by neglect and/or weak-minded indulgence. (Gilbert 116)

こうした考え方を踏まえた上で、『微熱の人』の3巻9章のアブナーの描写を分析すると、帝国主義のイデオロギーが見え隠れし始める。テキスト（208）では、アブナーは火による事故か病気によって、顔の皮膚をほとんど失ったことになっている。⁸⁾ 火薬を扱っている最中に何らかの事故に巻き込まれた可能性も否定できないが、注（406）によると、原稿の段階では、アブナーは植民地でマラリア熱（“**malarious fevers**”）にかかったことになっていたというのは示唆的である。先ほどのギルバート（116）の引用を参照すれば、植民地で熱病に屈したアブナーは、現地人化しやすい体質であり、イギリスにとって危険な存在であったということになる。実際、アブナーがかかった病気を、テキストは“**pestilences**”（208）という表現で描写している。“**pestilences**”には「伝染病」という意味以外に、「道徳的害悪」のという意味があることを考慮すると、この表現は、植民地の習慣が、アブナーが本来持っていたはずの英国性を病ませる効果があったかのような比喻を内包することに成功している。「遙かかなたの風土の不安定な天候が彼の外見に最悪のダメージを与えた」（“**the treacherous airs of remote climates had done their worst upon his exterior,**” 208）というテキストの描写は、『ジェイン・エア』の27章の有名なヨーロッパからの風の描写（346-47）と比較してみると、植民地の天候（灼熱の太陽）が皮膚にダメージを与えたという意味のみではなく、植民地の腐敗した道徳がイギリス白人男性のモラルにダメージを与えたという意味を含んでいるものとして解釈できる。

テキストでは、熱病にやられる前は、アブナーは「しなやかな皮膚」（“**his originally supple skin,**” 208）の持ち主であり、熱病のせいで、彼は「あたたかさをすべて失ってしまった」（“**taken all his original warmth out of him,**” 209）ことが強調されている。こうした一連の描写は、アブナーもイギリス

本国にいた頃は健全な精神の持ち主であり、植民地に出かけて行くまでは十分に英国的美德を備えていたことを示している。つまり、こうした描写は、彼にその英国性を失わせてしまったのは植民地での暮らしであることを、比喩的に伝えている。もちろん、「遙かかなたの風土の不安定な天候」が影響を与えたのは「外見」だけであって、「内側にはほとんど影響を与えなかった」(“little within,” 208) とあるので、すべてのイギリス人が植民地の不道德性に感化されるわけではなく、先ほどのギルバート(116)の引用からもうかがえるように、感化されてしまう人間は元来モラルが低かった人間であり、それがたまたま植民地に滞在することで外に出てしまう、とも解釈できるようになっている。⁹⁾

しかし、アブナーの様相を描写する3巻9章には、イギリス人は植民地との交わりによってその英国性を失い、道徳的に退行してしまうかのような描写が散見される。顔の描写以外でも、アブナーには「現代のイギリス人の生活との係わりを感じさせるものは何一つない」(“There was not a square inch about him that had anything to do with modern English life,” 208) と、外国生活で英国性を失ったかのような描写が与えられ、彼は「遠方から訪れた人」(“a man who had come from afar,” 208) であると、イギリス人であるのに「異国人」(“foreigner” 218) であるかのような描写を行い、現地人化が強調されている。また、彼の話す英語は「かつては英語だったが、今は国籍を伝える話し方を完全に失っているように思われた」(“words which had once been English, but which seemed to have lost the accent of nationality,” 209) と、英国性というものは異国との交わりで失われてしまうかのような、帝国主義的イデオロギーを含む描写が続いていく。

アブナーの取引先はインドではないが、現地人化しやすく、イギリス本土に腐敗した道德観を持ち込む存在として厭われた東インド会社の従業員、「ネイボップ」についての説明とアブナーを比較してみると興味深い。

Nabobs were Britons who did go home, and it was precisely in going home

that they posed the greatest danger to the stability both of their domestic homeland and the structure of its imperial world.... Returning Britons, transformed into nabobs by South Asia's fertile yet dangerous soil, brought with them the hint of luxury that jeopardized Britain's established order.... (Nechtman 90-91)

実は「ネイボップ」が軽蔑され、批判の対象になった背景には階級差別が存在していた。

The Company's original commercial character meant that its servants were believed to have originated from rather vulgar, artisan or trading social backgrounds.... Eastern sojourners thus remained associated with social classes that lacked the education, tradition of duty, or intellect to rule effectively. This political immaturity meant Company servants would, it was feared, end up infected with Asian concepts of government and authority. (Mackillop 237-38)

パワー家の一員であるアブナーも、ド・スタンシー大尉やデアとは異なり、商売を生業にした中産階級の出身である。「ネイボップ」ではないものの、彼も同様の偏見、敵意の対象(“such a welter of class prejudice, contempt, fear and outright hostility,” Mackillop 238) となっている可能性は高い。

こうした「ネイボップ」への嫌悪感が文学作品上に最も顕著に現れるのは、ロマン派時代のことであり、よくその典型例として挙げられるのが、サミュエル・フット (Samuel Foote) の戯曲『ネイボップ』(*The Nabob*, 1772) である。この戯曲の「ネイボップ」、サー・マシュー・マイト (Sir Matthew Mite) はアジアの衣装を身にまとい、イギリスの政界への進出を企んでいる。彼はインドで財を成した素性の知れない成金であるにもかかわらず、金に物を言わせて旧家のミス・オーダム (Oldham) との結婚を画策する。アブナーはサー・マシュー・マイトとは違い、自身の政界への進出は望んでいないが、姪ボーラの結婚によって、パワー家の子孫を准男爵家の一員にする野望を抱いている点で、彼がイギリス社会に与え得る悪影響は同程度に大き

いことがうかがい知れる。5巻11章(326-27)にアナーキストとしてのアブナーの描写がある。ここには、上流階級に属するド・スタンシー家を守り、その權威を復活させたいデアと、貴族や支配者、権力者を排除し、既成の体制を覆したいアブナー、という構造が浮かび上がる。アブナーが実に強なのは、排除や覆しよりも、体制の中に入り込むことの方が効果的であることを知っている点である。彼は姪ポーラを使って、准男爵家という支配者、権力者の側に入り込もうと目論んでいる。アブナーはアナーキズムに嫌気がさした反動で保守的になったのではなく、体制を覆すにはその内部に入り込み、自分が体制に取って代わることの方が効果的であることが分かっているのだ。ただし、前述したように、その所有者の所属する階級の象徴でもあり、イギリスという国家の象徴でもあるカントリーハウス、スタンシー・カースルは焼け落ちることから、新興階級が上流階級に取って代わるイギリスの未来はまだ約束されず、また、現地人化した帰国者がイギリスの道德観を根こそぎにする現実とは描写されずに終わっている。

野望を挫かれたアブナーは植民地へと帰って行く(5巻11章)。ここにも、悪者は植民地からやって来て、植民地に帰って行くという帝国主義のディスコースを読み取ることができる。ディケンズ(Charles Dickens)小説におけるオーストラリアに明らかなように、帝国主義的イデオロギーを内包した文学作品では、犯罪者の生きていく場所は植民地に確保されている：“Emigration...provides a convenient device for novelists wanting to provide happy endings for characters; for decades Australia provided an actual device for the disposal of criminals and other outcasts.” (Brantlinger 110)。ポーラとサマーセットにハッピー・エンディングを用意するために、ハーディはアブナーを周縁へと追い払うことを忘れない。

結び—スタンシー・カースル崩壊の意味

最後に、拙論「ハーディとカントリーハウス」で行った分析(坂田 9-11)

を今一度ここで用いながら、スタンシー・カースル崩壊の意味を考察しておく。ポストコロニアル批評で読むと、『嵐が丘』に登場するスラッシュクロス・グレンジ (Thrushcross Grange) とワザリング・ハイツ (Wuthering Heights) は、リントン家とアーンショー家の正当な子孫の結婚によって、マイヤー (Susan Meyer) の表現を借りれば、「リバーズ・インペリアルizm」の象徴である異分子ヒースクリフによる侵略を退けることで、平安を取り戻すと解釈されるが、『微熱の人』の結末にもこれと類似した構図を見出すことができる。父親をボーラと結婚させることで、彼にスタンシー・カースルを取り戻させた上で、自らの出生の秘密を公にし、ド・スタンシー家の正当な相続人になろうと目論んだデアの大胆な計画は、スタンシー・カースルの崩壊が暗示するように、達成されることはない。スタンシー・カースルに放火した犯人がデア自身である点は一見矛盾して見えるが、『ジェイン・エア』のソーンフィールド・ホール (Thornfield Hall) のように焼け落ちてしまうことで、スタンシー・カースルもデアによる「リバーズ・インペリアルizm」という侵略から身を守るのである。¹⁰⁾ カントリーハウスがイギリス国家を象徴し、その当主がイギリス国家を統治すべき理想像を指し示す象徴だとすると、ここに「イングリッシュネス」以外の血が入り込むことがないという点で、ハーディのスタンシー・カースルの取り扱い方にも、帝国主義のイデオロギーを読み取ることができる。

他のヴィクトリア朝作家と比べ、これまであまりポストコロニアル批評で分析されることがなかったハーディだが、以上見てきたように、彼のマイナー小説『微熱の人』は、その脇役たちの取り扱われ方に、出版当時のイギリスならではの帝国主義のイデオロギーを読み取ることが可能で、この小説の「現代小説」性を考える上で、興味深い研究テーマであると結論付けることができるだろう。

注

1) 同様の考え方は、大英帝国が揺らぎ始めた十八世紀から存在しており、一世代前のロマン派文学にも、すでにそうした懸念が描かれていた。フルフォード (Tim Fulford) を参照されたい。

2) 『嵐が丘』をポストコロニアル批評で読み、ヒースクリフを植民地からの脅威(「リパース・インペリアルイズム」)として読む読解については、マイヤー (Susan Meyer) の研究書の第三章を参照されたい。

3) この節の論の一部と「結び」には、『ハーディ研究』第37号に掲載された拙論「ハーディとカントリーハウス」の第三節「ハーディと大英帝国」ですでに論じたことを発展させたものが含まれており、一部内容に重複がある。そのため、同様の指摘を行っている箇所には、本文中で「ハーディとカントリーハウス」の頁数を示しておくこととする。

4) インドと退行の関係については、ギルバート (Pamela K. Gilbert) の研究書の第六章と、ネクトマン (Tillman W. Nechtman) の研究書に詳しい。なお、このことに関しては本論文の第三章で詳しく言及する。

5) ヨーロッパ各国政府が自らの植民地において、本国からの移民が現地人の妻や子どもを本国へ連れ帰らないように、婚姻を伴わない同棲を奨励した様子を、ストラー (46-51) が詳細にまとめているので参照されたい。

6) 文学作品におけるカントリーハウスの伝統を論じる際に欠かせないのは、十七世紀に流行したカントリーハウス・ポエムであるが、フォウラー (Alastair Fowler 21) によると、カントリーハウス・ポエムにおいて、地所はその所有者を象徴したり、その所有者と道徳的な相補関係にある。また、地所は国全体の見本にもなっている。

7) 他にも、『日陰者ジュード』(Jude the Obscure, 1895) に登場する植民地オーストラリア生まれのリトル・ファーザー・タイム (Little Father Time) は、両親のどちらもイギリス白人であるにもかかわらず、本国イギリスを訪れたとき、周囲の人々に悪影響を与えている。

8) ド・スタンシー大尉の顔がスタンシー・カースルの肖像画に瓜二つであることを示すことによって、スタンシー家という家系の存在が強調されていることから、この作品において、顔が両親、先祖との繋がりを示す大切な記号となっていることがうかがえる。となると、アブナーの顔の変貌は、彼とイギリス人の両親との繋がりを断ち、さらには彼が英国性の証明を失ったこと

の暗示となっているとも考えられる。

9) ウォレン・ヘイスティンズ (Warren Hastings) を糾弾したエドモンド・バーク (Edmund Burke) のレトリックについて考察したネクトマン (106・110) の指摘のとおり、イギリス人は植民地に行くと誰でも退行してしまうということになっては、イギリス人は帝国を支配するのに相応しい国民であるという神話が崩れ、帝国支配から手を引かねばならなくなってしまう。ハーディもそうした矛盾に陥らないように、アプナーは元来モラルの低い人間であったことを暗示する描写を行うことも怠っていない。

10) 文学作品に登場するアイルランドのカントリーハウスの表象を分析したケルスオール (Malcolm Kelsall 5) の研究書によると、カントリーハウスを焼き払うという行為は、本を焼く行為に似て、極めて象徴的であり、カントリーハウスが表象しているものへの憎しみや恐怖を表しているという。焼け落ちるスタンシー・カースルは、ソーンフィールド・ホール同様、植民地主義という大英帝国の腐敗した過去を表象しているととらえることが可能である。しかし、ソーンフィールド・ホールは焼け落ち、パーサは死んでも、ロチェスターは生き残り、また、スタンシー・カースルは焼け落ちても、ド・スタンシー大尉も、そしておそらくデアも生き残っているという事実は、表象を消し去ったところで、ソーンフィールド・ホールやスタンシー・カースルが表象する過去そのものは消えることはないという現実を指し示しているのかもしれない。

引用文献

- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914*. Ithaca: Cornell UP, 1988.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Ed. Michael Mason. London: Penguin, 1996.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. 1847. Ed. Pauline Nestor. London: Penguin, 1995.
- Brougham, Henry. *An Inquiry into the Colonial Policy of the European Powers*. Vol. I. 1803. Whitefish, MT: Kessinger, 2009.
- . *An Inquiry into the Colonial Policy of the European Powers*. Vol. II. 1803. Whitefish, MT: Kessinger, 2007.

- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness*. 1902. Ed. Robert Hampson. London: Penguin, 2000.
- Foote, Samuel. *The Nabob*. 1772. *The Works of Samuel Foote V2: The Commissary; The Lame Lover; The Bankrupt; The Cozeners; The Maid of Bath; The Devil upon Two Sticks; The Nabob and More*. Whitefish, MT.: Kessinger, 2007.
- Fowler, Alastair. *The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth-Century Estate Poems and Related Items*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1994.
- Fulford, Tim. "Romanticizing the Empire: the Naval Heroes of Southey, Coleridge, Austen, and Marryat." *Modern Language Quarterly* 60.2 (1999). *Literature Resource Center*. Gale. Japan Women's University. 21 Aug. 2008. Web.
- Gilbert, Pamela K. *Cholera and Nation: Doctoring the Social Body in Victorian England*. Albany: State U of New York P, 2008.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. 1895. Ed. Dennis Taylor. London: Penguin, 1998.
- . *A Laodicean*. 1881. Ed. John Schad. London: Penguin, 1997.
- Kelsall, Malcolm. *Literary Representations of the Irish Country House: Civilisation and Savagery*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003.
- Mackillop, Andrew. "The Highlands and the Returning Nabob: Sir Hector Munro of Novar, 1760-1807." *Emigrant Homecomings: The Return Movement of Emigrants, 1600-2000*. Ed. Marjory Harper. Manchester: Manchester UP, 2005. 233-261.
- McClintock, Anne. *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*. New York: Routledge, 1995.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Montesquieu, Charles de Secondat, baronde. *The Spirit of the Laws*. 1748. Eds and trans. Anne M. Cohler, Basia Carolyn Miller, and Harold Samuel Stone. Cambridge: CUP, 2009.
- Nechtmann, Tillman W. *Nabobs: Empire and Identity in Eighteenth-Century Britain*. Cambridge: CUP, 2010.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. 1993. London: Vintage, 1994.
- . *Orientalism*. 1978. New York: Penguin, 1995.

坂田 薫子「ハーディとカントリーハウス—ジェイン・オースティンとの比較を通して」（『ハーディ研究』第 37 号、2011 年：1—14 頁）

Sneidern, Maja-Lisa von." *Wuthering Heights* and the Liverpool Slave Trade." *ELH* 62.1 (1995): 171-196.

Stoler, Ann Laura. *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. 2002. Berkeley: U of California P, 2010.

Thomas, Sue. *Imperialism, Reform, and the Making of Englishness in Jane Eyre*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2008.

転覆させる十字——『森林地の人々』考察——

亀澤 美由紀

1. 転覆させる十字

「死んだら脳を提供する」、証文にグラマーがインクで記した十字の印は、10 ポンドのカネと引き換えに、彼女の手から医師フィッツピアズの手に渡る。のち、自分の書いた証文を取り返して欲しいと病の床から懇願されて、グレイスは老婆のために医師を訪ねる。ここで再び、グラマーの印は彼の手からグレイスを通してグラマーの手に戻る。

この一連のやり取りのなかで、グラマーが書いた十字はグロテスクに意味と価値の変容を遂げる。証文の代金としてグレイスが差し出す 10 ポンドをフィッツピアズは受け取らない。代わりに支払われたのは、実はグレイスの顔である。老女は直観で言い当てていた——「あんなお方に頼むんなら[メルベリー夫人なんかより]もっと若い娘の顔がいるんですよ」。¹⁾フィッツピアズはグレイスの美しさに心動かされ、科学的探究の機会を提供してくれるはずの証文をいとも簡単に手放すのである。はじめグラマーの脳の代理であったはずの「インクで書かれた太い十字」(18: 117) は、ここへきて、グラマーの脳の表象であると同時にグレイスの美しい顔の代価としてフィッツピアズからグラマーの手に戻る。しかもこの不気味な意味・価値の変容に、証文をやり取りする者たちの誰も気が付かない。

書かれた文字(記号)が、書き手の意図を超えて別な意味を持ち始めるという象徴の転覆させる力が、ここでは二重に働いているのがみてとれる。ひとつには、この十字はグラマーの意図を覆す。なにしろ、グレイスをジャイルズと結ばせたいというグラマーのかねてからの希望は、フィッツピアズをグレイスに引き会わせたことによって図らずも潰えてしまうのだから。さらにまた、この十字は階級をも無化する力をもつ。なぜなら自分の名前すら

書けない無学のグラマーが、自分の脳を取り戻さんとして淑女グレイスの顔を「売る」のだから。

『森林地の人々』（1887）は象徴の力と、人間たちの挫折させられた意図とが錯綜する物語である。あと二つ、例を挙げておこう。ひとつはジャイルズの戸にチョークで書かれたことば。ジャイルズに心を寄せるマーティはこう書きつける——「おお、ジャイルズ、おまえは住処を失った / それゆえ、ジャイルズ、おまえはグレイスも失うのだ」(15: 99)。その二行目をグレイスはこう書き換える——「それゆえ、ジャイルズ、グレイスはおまえのものだ」(15: 100)。どちらの娘も自分の切ない恋心をこの二行に託す。しかし書かれた文字から三人の若者が受け取るのは、この上なく冷酷なメッセージではない。ジャイルズはこれを「グレイスとの結婚は諦めろ」としか読まず、これを書いたマーティの秘めた恋には気づかないし、グレイスの書き換えもこどものいたずらとしか思わない。一方のグレイスも一連のやり取りを「ジャイルズに結婚の意思はもはやない」の意と解す。最初にしたマーティですら、「ジャイルズはグレイスのものだから諦めろ」という、言われるまでもなくわかりきった現実をあらためてつきつけられる。

もうひとつの例は、シャーモンド夫人がフィッツピアズの結婚の噂を聞いて語ったとされることば——「もっと良い結婚があったでしょうに。ご自分の可能性をふいにしてしまわれたのではないかしら」(25: 164)。これを伝え聞いたフィッツピアズの脳裏に夫人のことばは「まるで壁に書かれた筆跡のように」(25: 165)あらわれて彼をいらだたせる。彼にとって、それは自分に対して向けられた社会的評価・軽蔑としてしか響かない。昔愛した男を年端もいかぬ若い女に奪われ、ロマンティックな恋の「可能性」を一方的に打ち碎かれた、捨てられた女の恨めしさなど、彼に伝わるはずもない。ここでもまた、ことばが書き手（話し手）の真意を欺いて、あらぬ方向へその意味を変化させる。

上に挙げた三つの例はすべて、象徴交換のなかでことばのもつ転覆させる力、そのために挫かれていく人々の意図を物語る。だが象徴回路のなかで交

換されるのは、ことばだけではない。冒頭にグラマーの十字を取り上げたのは、それが文字（ことば）の代わりであると同時に証文（一種の信用手形）でもあるからだ。ことばと貨幣という一見異質なものが、象徴交換という括りのなかで共通の性質を帯び始める。その事実をグラマーの十字は端的に示すのだ。

そしてもうひとつ、女性の身体もまた、「結婚」という象徴交換のなかの交換財であることを、論を始めるにあたって指摘しておこう。²この物語世界は交換経済が実に限なくいきわたる。いかにヒントックの森が自然に見えようとも、木一本一本は誰かの（シャーモンド夫人の）財産であり、人間の身体ですら——マーティの髪も、グラマーの脳も、ジョン・サウスの脳も——売買の対象となる。ましてや美しく教養あるグレイスの身体は、「結婚」という市場に出される高価値の財である。この小論は、象徴交換における交換財（ことばや女性の身体）のもつ転覆させる力が、経済変動に対する不安と重なって経験される様子を、『森林地の人々』から析出しようと試みるものである。

2. 信託紙幣と実体貨幣

本論考が経済システムに関心を寄せるのは、次の二つの理由による。ひとつに、この物語の至るところに、当時一般化しつつあった信託紙幣に対して人々が抱いていた抗しがたい魅力と漠たる不安が描かれているからである。しかもその不安はその他の象徴交換——言語システムや結婚制度など——に人々が抱く不安や脅威と通底している。いや、通底しているどころか、言語や結婚制度に対するリアリズム的信頼が揺らぐ様子を、実体貨幣（たとえば金貨）から信託紙幣（株や債券など）への経済の移り変わりどピタリ重ねることすら可能なのである。第二に、次節で論じるとおり、金融のメタファーはことばや女性の身体といった別な種類の交換財に対しても有効だからである。

金融と文学との間に何かしらの関係があったとの主張はすでに批評家た

ちによってなされている。パトリック・ブランドリンガーは *Fictions of State* (1996) のなかでヴィクトリア朝のリアリズム小説が抱える現実の欠如・仮想性は、当時の信用経済——手形や株式・債券など一種の「借金」を前提とした経済——に依拠したイギリス経済の「実在なき繁栄」とパラレルな関係にあると主張する³⁾。貨幣制度と文学様式とを同スコープにおさめた点で、それなりに魅力のある研究である。ただしひとつ欠点を挙げるとするならば、ヴィクトリア朝においてはソブリン金貨のような実体貨幣や補助貨幣、あるいはそれに代わる兌換紙幣も広く使われていたのであり、ブランドリンガーのようにそれらを無視して信用経済で一括することには若干無理があろう。

その点、『言語の金使い』（1984）の著者ジャン・ジョゼフ・グーは貨幣を実体貨幣と名目貨幣に分けて論ずることによって、論をより精緻なものにするのに成功している。グーにならって貨幣を分類すると、次のようになる。第一に、それ自体に十全な真正価値を備えた実体貨幣。金貨幣・銀貨幣がこれにあたる。第二は、金(gold)との兌換を保証された表象的な紙幣、すなわち兌換紙幣である。第三の種類は、保証の定かでない信託紙幣、債券など。そして第四が、兌換不可能な名目貨幣である。名目貨幣とは、金(gold)による価値の保証がなく、政府による強制流通制度のもとでしか機能しない、完全な取り決めの貨幣のことであり、金本位制停止以降の現在の貨幣はこれである。実体貨幣を名目貨幣から分けるものとして、金(gold)による保証があるか否かの違いがあるわけだが、両者の違いに注目することによって、グーは貨幣が金(gold)という保証を失う瞬間、すなわち「表象作用を突き崩し、シニフィアンの漂流時代を始動させるような記号と物との断絶」⁴⁾が起きる瞬間、「表象作用に支えられていた社会から、もはやそうしたタイプの支えを必要としない社会への移行」⁵⁾の瞬間をとらえるのである。

グーは、文学におけるリアリズムの危機と経済における金本位制の危機とが同じ 1920 年代に起きていることに注目する。1920 年代の経済危機のなかで、世界は一時金本位制を離脱した(その後第二次世界大戦後、金本位制は復活するのだが、1971 年のニクソン・ショックを経て 1973 年ついに完全停

止、今に至る)。金本位制のもとでは貨幣の価値は金 (gold) による保証を与えられており、その価値は常に一定だったのだが、金本位制が停止されるにおよび貨幣の価値は他の通貨との相対的關係によって変動するようになった(変動為替相場制)。金 (gold) という基準点 (原器) を失って、貨幣は「浮遊するシニフィアン」となったのである。リアリズムの危機もまさにこれと類似の現象であるとグーは言う。すなわち、ことばとモノのつながりを絶対的
とみなし、ことばが現実を正確に写実すると考えるリアリズムから、ことばも「浮遊するシニフィアン」であるとするモダニズムへと文学様式が移り始めたのである。グーはアンドレ・ジッドの『贋金使い』(1925)を論じながら、次のように言う。「金貨幣に基づく価値流通の破綻が、言語の写実的もしくは表象的なシステムの破綻を示すメタファーとなっているのだ。貨幣の金換算価値に依拠した交換システムを維持できないことが、リアリズム (そして豊かな表現性) という旧来的な価値観に基づく文学的言語を引き受けることができないことを示す最良のメタファーであるかのごとく、すべては展開しているわけである」。⁶⁾そして、金 (gold) という基準点の消滅およびそれと同時に生起する言語の揺らぎは、当然ながら主体や父性の正当性に対する疑いをも生むと、グーは指摘するのである。

『森林地の人々』は 1920 年代に一步先んじるかたちで、貨幣への絶対的信頼が揺らぎ始めた 19 世紀末の人々の動揺を敏感にかぎ取り、ドラマ化する。この物語世界はグーが挙げる四種類の貨幣のうち、実体貨幣 (金貨とそれを支える補助貨幣)、それに続く兌換紙幣 (グレイスがグラマーの証文と引き換えにフィッツピアズに渡そうとするのは 2 枚の 5 ポンド紙幣である)、そしてメルベリーを悩ます信託紙幣の三種が入り混じる。信託紙幣の恩恵と脅威をもっとも現実的レベルで感じているのは材木商メルベリーであろう。物語冒頭、夫婦の会話はメルベリーが所有する債券に触れる——「また道路債券のことを考えておいでなのでしょう。」「いやそうではない。もっとも、あの債権は買わなければよかったとは思つとるがね」(3: 16)。あとを読むと、彼がこの債券一枚あたりに 200 ポンドの大金を投じていたことがわかる。200

ポンドの価値が目前で減じていく恐怖は、メルベリーのみならず当時の読者にも容易に共有されうる現実であった。

一方、信託紙幣が抱える不安定さの対極にあるのは、実体貨幣(金貨・銀貨幣)のゆるぎない質感と重量・本物らしさである。髪屋がマーティに髪代として置いていく2枚のソブリン金貨は十全たる存在感をもつ。これらの金貨は「機会をうかがって見張りに立つ二つの黄疸にかかった目」(3: 15)のように彼女をじっと見つめる。その価値は決して減ずることなどありそうにない。減ずる恐れがあるとすればそれは金貨の価値ではなく、金貨にみつめられる彼女の決心——髪を売るまいという決心——である。信託紙幣が投資・投機への期待と不安を背中合わせに担うのに対して、金貨はたじろぐことのない実在性を保ち、その使用者であるはずの人間よりも断固とした意志力をすら放つのである。

ソブリンへのこだわりは、例のイタリア系アメリカ人の挿話にも現れる。ヒントックハウスへの案内を乞うたあと、男はジャイルズに「助けてもらった礼として金貨を差し出した。それはソブリンのようだった」(He... offered him a gold coin, which looked like a sovereign, for the assistance rendered. 21: 137)。一見何の変哲もない関係詞節による挿入「ソブリンのようだった」に注目してみよう。一体誰の視点からその「ようだった」のか。金を差し出す男自身はそれがソブリンであるかどうかを知っているはずだから、男の視点からでないのは確かだ。一方のジャイルズは礼を受け取る気など毛頭ないから、彼の視点にもそれがソブリンであるかどうかを見極める姿勢が混じるとは思えない。語り手の視点にしては妙に自信のなさが目立つ。見たところ不要なこの関係詞節の挿入は、結局のところそのごちなさゆえに、ソブリンに何か特別の注目を与えるよう、読者に注意を促すのである。貨幣経済とはまったく縁のなさそうな(実際にはそんなことは決してないのだが)ヒントック村で、ソブリン金貨は特異な物体としてこの場に描きこまれ、その違和感は夜の闇のなかで金貨の存在を一層、厳然たるものにする。

3. <浮遊するシニフィアン>への投機

さて、信用経済を利用して資産形成にいそしむメルベリーが、娘の身体をひとつの「財」とみなしている事実はいまさら指摘するまでもあるまい。となると、グレイスの結婚をめぐるこの物語を金融のメタファーで読み直すことは妥当だろう。「投機」とは利益を目論んでカネをつぎ込むことであるが同時にまた、対象に対してさまざまに想像を巡らせることをも意味する。メルベリーは娘に高額な教育費をつぎ込み（「投機」し）、彼女の身体の上に「良縁」という物語を思い描く（「投機」する）。他方、「投機」にかけてはフィッツピアズも負けてはいない。グレイスとの面識を得る前に既に彼は「首に白い小さなボアを巻いて、手袋の回りに白い毛皮をつけた、とても魅力的な少女」(16: 105)であるグレイスの身体の上に勝手気ままな性的幻想を描く。シャーモンド夫人か、それともヒントック・ハウスの訪問者かと想像をめぐらし、材木商の娘と知ると「彼女と会話するでもなく、ただ単にその姿を見ただけで、材木商の可愛い娘との粗野な愛情行為」(19:121)を思い浮かべるのである。グレイスの「白い」身体、空っぽで中身を充填されるのを待っているかのような身体は、「投機」する（物語を書き込む）に格好の対象となる。ただしそのどちらの男も「投機」に失敗、目論見が外れ、人生の誤算を思い知ることになるのだが。

“I do.”ということばを発する行為が結婚を成立させる。この一言が二人の人間を永遠に結びつけると信じるとき、そこにあるのはことばがその行為を遂行するという、ことばに対する絶対の信頼である。ことばに絶対の信頼を寄せる人間にとって、金貨が十全たる真正価値をもつように、“I do.”は厳然たる現実そのものである。金貨と同様、このことばの価値(意味)は決して減ずることも変わることもない(はずである)。結婚制度の絶対性を信じて疑わないメルベリーにとって、ことばは「実体貨幣」(ことばと現実が一致)か、少なくとも「兌換紙幣」(ことばは現実を写実する信頼できる道具)である。リアリズム的な表象作用によって保証されたはずのことばは、その価値(意味)を減ずることも変化させることも決してないはずだった。

したがって、フィッツピアズの結婚の誓いが字義通りのことを意味しないと知った時、メルベリーは現実が崩れる思いをする。「長年彼が頼ってきた判断が最近になって、まるで偽りの友人が仮面をとるように、それまでずっと堅固だと思ってきたところにいきなり偽善や見せかけの深淵をのぞかせたように思われ」(31: 202)、これまで堅固と思っていた現実が後退し、彼の目に木々は「実体のある日々をすでに過ぎ、やつれた灰色の幻影」のようには見えない(31: 202)。フィッツピアズと娘の婚姻が、期待していたようなメルベリー家の格上げにつながらず、ひょっとすると孫すら望めないかもしれない事実に彼は愕然とする。手堅いと思っていた娘の良縁が、実はとんでもない「投機」行為であったことが発覚するのだ。グーいわく「言葉とはひとつのゲーム＝賭けなのだ。・・・財宝や手持金といった保証物、あるいは原器＝基準尺度[金(gold)のこと]に類似するもの、そんなものはなにひとつない」。⁷⁾ だがそのことを知ったときには時すでに遅く、メルベリーの手には債務不履行の手形(不実な娘婿)だけが残される。道路債券に対する彼の不安が、言語と結婚制度の絶対性に対する疑念となって、かたちをかえて再来するのである。

一方のフィッツピアズは結婚の誓いにさほどの絶対的価値をおかない。「結婚は民事契約だ。手っ取り早く簡単に済めば済むほどいい」(23: 149)と言う彼にとって、結婚は単なる取り決めにすぎない。それは明らかに信託紙幣であり、あるいは現在で言うところの名目貨幣に相当する。

だがフィッツピアズとてメルベリー父娘同様、信用経済のワナに落ちた身であることに変わりはない。フィッツピアズの哲学は多分に形而上学的である。人は「アイデア」を現実世界の事物に投影しているにすぎないと考える彼にとって、愛とは「視界に入るもの、適当な対象に対して考えを投影したときに感じられる喜び」(16: 106)のことである。彼のこの哲学を貨幣制度にあてはめるならば、兌換性を保証された表象的紙幣、兌換紙幣になぞらえることができるだろう。だがグレイスの姿を一目見た彼は彼女に魅せられ、彼女の身体に際限なく「投機」しはじめる――信用経済に巻き込まれていくので

ある。「投機」にはリスクがつきもの。女性の身体をめぐる象徴回路では、交換する主体（男）の意図とは無関係に、交換財（女性の身体）がやがて力もちをはじめ。ちょうど髪屋のソブリン金貨がそれ自体の価値は決して減ずることなく、逆にそれを見るマーティの決心を揺るがせたように。グレイスに想像をかきたてられたフィッツピアズは、「今度ばかりはアイデアが実体のある対象のなかに完全に宿った」（20: 130）と考える。グレイスのなかに金貨幣のような実体的価値をみとめ、それを手にいれるべく結婚へと突き進み、人生計画を挫折させることになるのだ。「投機」しすぎて投機の対象に呑み込まれ、人生に挫折した男がフィッツピアズである。

以上のような事柄を考慮に入れると、実体貨幣と労働の美德がジャイルズの上に重ねて描かれているのは至極当然に思えてくる。ジャイルズがカネを払うとき、それはツケ（借金）で贅沢を重ねるフィッツピアズと好対照をなす。ジャイルズが案内した質素な食事処でグレイスは、その場の雰囲気到场違いな思いをし、惨めさを感じる。語り手はそんなグレイスをとがめるかのように次の事実を告げるのである。外出のたびに贅沢なホテルを利用するフィッツピアズが「請求書の山」（38: 256）を抱えているのに対して、ジャイルズは労働によって稼いだカネから「正直に即金で」（38: 256）支払ったのだ、と。ジャイルズに代表される現金払いと正直な労働とが、フィッツピアズに代表される信用経済と虚偽・不誠実・放蕩に対置される。物語の道徳的共感が前者とともにあるのは、言うまでもない。

だが、時代の流れは確実にフィッツピアズが代表する信用経済に向かっており、その近代化の流れを止めることはできない。グレイスはジャイルズへの追憶を捨て、フィッツピアズとの縊りを戻す。これと似たような、しかしもっと互角の、もっと激しい交代劇を我々はこれ以前の小説のなかに見つけることができる。それは『カースタブリッジの町長』のヘンチャードからファーフリーへの権力移譲である。そこでも肉体に汗して働いてきたヘンチャードと、華奢で肉体労働を知らないファーフリーとが対置され、信用取引と先物買をうまく制したファーフリーがヘンチャードを淘汰する。ジャイル

ズとフィッツピアズの生存競争もこれに似た経済システムの変動を映し出している。ただしこの二人のライバル関係においては、経済システムへの対応の違いは勝敗を決める力にはなっていない。むしろ信託経済に対する当時の人々の不安を掬い上げ、それを物語全体に織り込むことによって、より大きな社会変動を映し出すことがこの物語の焦点と言えよう。であればこそ、ファーフリーが手際よく信用取引を処理するのに対して、『森林地の人々』はフィッツピアズが「信用取引」の落とし穴にはまるところから始まるのである。そして『森林地の人々』は信用経済に対する不安を映し出すことを超えて、さらに象徴交換そのもの——ことばを介したコミュニケーション、女性をやり取りする結婚制度——に対する絶対的信頼・安心が揺らぐ瞬間を映し出すのである。経済システムが金(gold)という基準点を失い、貨幣が「浮遊するシニフィアン」と化すとき、父は権威を失い(「長年の労働と、多大な金銭的負担をかけて授けてやった教育を彼女に非難されようとは、彼は思ってもいなかった」(30: 201)、言語体系や結婚制度もその基準点・権威の拠り所を失う。

とりあえずの結論として、グーが『贗金使い』に関して述べたことばが『森林地の人々』にピッタリとあてはまりそうだ。すなわち、『森林地の人々』は「金貨幣あるいは表象的言語へのノスタルジックな追憶から、そうした言語はもはや維持不可能であり、記号流通の有する実際的な条件にはそぐわなくなっているという、ポジティブでもネガティブでもある予感への変わり目」⁸⁾に立つのである。「金貨幣あるいは表象的言語へのノスタルジックな追憶」とは誠実なジャイルズへの共感であり、その彼が減びていくこの現実には「ネガティブ」であることこのうえない。だが、表象的言語観およびそれに支えられた結婚制度がもはや「維持不可能」であり、「記号流通の有する実際的な条件にはそぐわなくなっている」という予感は、のちの『日陰者ジュード』や『恋の霊』といった果実を予告する。『ジュード』において、我々はリアリズムという文学様式がもはや現実の「実際的な条件にはそぐわ」ず、リアリズム的語りの内部から浸食を受け、崩壊していく様子を見ることになる。⁹⁾

またフィッツピアズの不実とも見える愛の哲学は、ピアストンにおいては芸術的活動の源泉として蘇る。ピアストンの芸術活動は、「恋の霊」が移り住む幾多の女性の身体——「浮遊するシニフィアン」——を形にとどめることにあるのだから。不安と期待を込めて、ことば——「浮遊するシニフィアン」——に「投機」するハーディの姿を『森林地の人々』は綴るのである。

註

1) Thomas Hardy, *The Woodlanders* (Oxford: Oxford UP, 2005), Ch.18, p. 109. 以下、この小説からの引用はこの版に拠り、本文中に括弧で章番号および頁数を記す。

2) グレイスの身体を象徴交換のなかの交換財・記号としてとらえる読みは、すでに批評家たちによってなされている。たとえば Elisabeth Bronfen は "Pay as You Go: On the Exchange of Bodies and Signs" (1993) というそのものズバリのタイトルの論文のなかでハーディの女性の身体は「交換され、刻印され、凝視され、解読され、模倣され、別な何かによって代用されてついには置き換えられる」と主張し、身体が記号へ変換されていくプロセスを論ずる (Margaret R. Higonnet ed., *The Sense of Sex: Feminist Perspective on Hardy*, Urbana: University of Illinois Press, 1993, p. 67)。Patricia Ingham も男たちがグレイスを解釈しようとしてグレイスに意味を付与し、それに抑圧されて彼女が自らの意味を発揮できずにいる事実を指摘する (Patricia Ingham, *Thomas Hardy*, Atlantic Highlands: Humanities Press International, 1990)。また Penny Boumelha は、グレイスは「空っぽで、消極的な、他の登場人物の単なる反射板か登録機にすぎない」ため、一貫したパーソナリティが存在せず、代わりに曖昧さや緊張が錯綜すると指摘する。そして、こうした実在なきセクシュアリティこそがグレイスの特徴であり、交換財・客体であるはずのグレイスが逆に男たちのプロットを挫いて動き出す可能性はここにあると分析する。 (Penny Boumelha, *Thomas Hardy and Women: Sexual Ideology and Narrative Form*, Madison: University of Wisconsin Press, 1985)。

3) Patrick Brantlinger, *Fictions of State* (Ithaca : Cornell University Press, 1996) 特に p.7, 28-29, 45, 146。

4) ジャン・ジョゼフ・グー『言語の金使い——文学と経済学におけるリアリズムの解体』土田友則訳、新曜社、1998年、p.7 [Jean-Joseph Goux, *Les Monnayeurs du langage*, 1984]。

5) 前掲書、p. 8。

6) 前掲書、pp. 26-27。

7) 前掲書、p. 36.

8) 前掲書、p. 36.

9) 『日陰者ジュード』とリアリズムに関しては、拙論「象徴交換の亀裂——ジュードとリアリズムと＜古い革袋＞」『人文学報（表象文化論）』首都大学東京（2011 年 3 月）、pp.43-66 を参照されたい。

Jude the Obscure[d] — 『ジュード』における真の悲劇

鳥 飼 真 人

1. 〈自然〉 — 隠されて見えない「真理」

クライストミンスター (Christminster) への憧れに始まり、様々な遍歴を経て、最後にはその地で死に至る — 『日陰者ジュード』 (*Jude the Obscure*) に描かれるこの何とも象徴的な人生をもとにジュード (Jude) の悲劇を考える時、彼の人生はキリストのそれに重ねられる。¹⁾ そこへいわゆる「肉と霊の戦い」という言葉が加わると、この小説の物語世界は、その起源でもある宗教的理念によって形成されているという前提を誰もが疑わなくなる。しかし我々は、この前提に基づく評論がジュードの真の悲劇の有様を覆い隠してきたことに気づかなければならない。このような評論は、ハーディ (Hardy) 自身が言うように、〈自然〉 (Nature) という彼独特の言葉の本来の意味を「無視」しているのである (Tess x)。

ハーディが自ら大文字で表すこの語 (Nature) は、単なる自然現象を意味しない。〈自然〉が芸術作品においてどのように表象されるべきかを考える彼は、次のように書く — “I don't want to see landscapes . . . because I don't want to see the original realities – as optical effects. . . . I want to see the deeper reality underlying the scenic . . . The 'simply natural' is interesting no longer” (*Life* 185)。彼は続けて述べる — “I was thinking . . . that the material is not the real – only the visible, the real being invisible optically” (*Life* 186)。ハーディが求めているのは「視覚効果」としての実在「よりも深遠なる本質」、単に目に見えるものの内奥に潜む「真なるもの」であり、これこそが彼の求める〈自然〉であると考えられる。そしてそれは、風景の「下に横たわっている (underlying)」 — つまり我々が知覚しうる現象＝自然に「覆われて＝隠されて (under or beneath)」いる、さらにはその「外観 (surface-aspect)」の「内 (under=beneath)」

に「存在する＝現れ出る (exist)」がゆえに「隠されて」いる ("Underlie," def.3) — のである。ハーディにとって「真なるもの」が「見えない」のは、人間が盲目であるからではなく、それが「隠されている」からなのである。

上に引用した文章の中でハーディは、〈自然〉という語と共に形而上学の第一の主題、つまり「有るということ (存在)」について問うている。しかしハーディの形而上学は、彼の時代に至るまで西洋において当然のごとく受け入れられてきた、プラトン (Plato) に端を発する伝統的な哲学体系とは全く相容れないものである。²⁾ この見解の妥当性を例証する上で有益な手引きとなるのが、古代ギリシア思想の再解釈を行なった大著として広く知られているハイデガー (Heidegger) の『形而上学入門』 (*Introduction to Metaphysics*) である。

2. 「存在への問い」：ハイデガーによる古代ギリシア思想の再解釈

2.1. 〈有＝ピュシス〉：有るということそれ自体

ハイデガーは古代ギリシアの思想家、いわゆるソクラテス以前の思想家の時代に遡り、そこで展開された「有るものへの問い」について述べる — “In the age of the first and definitive unfolding of Western philosophy among the Greeks, when questioning about beings as such and as a whole received its true inception, beings were called *phusis*” (IM 14).³⁾ このギリシア人による問いは「最も広く最も深い問い」として「最も根源的」であり、それを問うことは「形而上学の根本の問い」 (IM 19) を問うことに等しい。後世においてこの「有るものそれ自体 (beings as such)」としての〈ピュシス (*phusis*)〉という語にはラテン語の “*natura*” という翻訳が用いられ、現在ではそれは自然 (*nature*) として解釈されている。これらの解釈によって「そのギリシア語の根源的な内容は既に押しのけられ、その語が持つ真正な哲学的明示性は破壊されている」 (IM 14) とハイデガーは言う。つまり、現在我々はピュシスという語を、有るものそれ自体ではなく、単に現前するもの (自然) として解釈しているのである。

ハイデガーによれば、本来〈ピュシス〉という語は、単なる諸現象ではな

く、「それ自体から現れ出るもの・・・それ自体を暴露するという展開、そのような展開において外観（仮象）の - 中に - 歩み入ること（the coming-into-appearance）、そしてその中でそれ自体を保持し留まること、つまり現れ出つつ - 滞留しながら支配すること（the emerging-abiding sway）」（IM 15）を意味する。この「現れ出ること」としての〈ピュシス〉は〈有〉、つまり有ることということそれ自体（Being itself）であり、「そうであって初めて、有るものは目に見えるものとなり、そのようなものとして留まり続けることができるのである」（IM 15）。ところで〈有＝ピュシス〉が仮象の中に「歩み入る」ということは、「〈有〉、つまり〈ピュシス〉が・・・外観と外見の提示に存するのであるから、それは本質的に、したがって必然的かつ恒常的に外観の可能性の中にある。この外観は、有るものが真理つまり隠れなきこと（unconcealment）の中にあることを、まさに覆い隠す」（IM 110）。だから古代ギリシア人にとっては、〈有〉がその本質を、「隠されてあること（concealment）」、「隠蔽（disguising）」としての「仮象」の内に／と共に保持していることを明らかにする必要があったとハイデガーは主張する。⁴

2.2. 〈ピュシス〉が分離する：プラトンとキリスト教による歪曲（1）

しかし〈ピュシス〉という語の本来の意味は、後に出現する二つの大きな思想——プラトニズムとキリスト教思想——によって「歪曲」され「誤り伝え」られてしまう。ハイデガーは次のように指摘する。

Only with the sophists and Plato was seeming explained as, and thus reduced to, mere seeming. At the same time, Being as *idea* was elevated to a supersensory realm. The chasm . . . was torn open between the merely apparent beings here below and the real Being somewhere up there. Christian doctrine then established itself in this chasm, while at the same time reinterpreting the Below as the created and the Above as the Creator, and with weapons thus reforged, it set itself against antiquity as paganism and distorted it. (IM 111)

プラトンによって生み出された「深淵 (chasm)」によって、本来〈有＝ピュシス〉に帰属するものとしての仮象は、ただの仮象へと貶められる。さらに、〈ピュシス〉という語に用いられた“natura”というラテン語の翻訳は、「キリスト教及びキリスト教的中世にとって尺度を与えるものとなった。このキリスト教的中世は近代哲学へと伝えられ、その哲学は中世の概念世界の中で動き、そうしてあの周知の表象と概念語を造り出して」(IM 14) いる。こうして「存在への問い」を真に開始したギリシア人たちの思想を誤り伝えるプラトンとキリスト教によって、地上に生きる人間の世界（現世、下界）は完全な「仮象世界」（〈有〉とは分離されてしまった）となってしまうのである。

2.3. 人間存在が分離する：プラトンとキリスト教による歪曲（2）

プラトンが〈有〉をイデアと解釈したことによって、人間存在に対する考え方に変化が起こる。プラトン以前のギリシア人にとって、人間とは本来、〈有〉に直接帰属する存在、〈有〉へ向かって自らを関係させていく存在である。「人間存在の本質や有り方は、〈有〉の本質によってのみ規定される」(IM 148)。このような人間存在を、ハイデガーは「現存在」として規定する。しかしこの現存在は、プラトンとキリスト教によって「魂」と「肉体」とに分けられてしまう。プラトンによれば、人間がイデアを求めるということは、人間が「思惟」することによって、「魂」が「肉体から別れを告げ・・・ひたすらに存在そのものを熱望」(1: 416) することである。これは「知を求める者」が「知の獲得」へ向かうということでもある。この「知」は「魂の案内人である知性」のみが観照することのできる「真の知」、つまり「真の意味における存在」についての知識である (3: 154)。ゆえに魂とは「神的なもの」である。そして魂は「支配し治める」ことを、肉体は「従い仕える」ことを命じられる (1: 434) のであるが、その命を下すのは「自然」(1: 434) であり「神」(3: 720) なのである。このように、天上のイデア界に向かって

上昇する魂に神性を与えるプラトニズムが、キリスト教哲学に少なからず影響を及ぼしていることは言うまでもない。それは初期キリスト教における教父哲学に、特に形而上学の面において大きな影響を与え、その後教父哲学は、中世におけるキリスト教発展の土台となり素地となる。⁹

1. 〈ピュシス＝有〉としての〈自然〉：『ジュード』における

悲劇考察の鍵概念

前章で見てきたハイデガーの解釈を援用することによって、本稿の第一の目的である『ジュード』の悲劇の分析において有益な見解をいくつか提示することができる。

- (a) ハーディの求める「真なるもの」としての〈自然〉は、古代ギリシア的〈有＝ピュシス〉と非常に近い性質を持っている。この〈自然〉は、一般的な意味での自然＝仮象の内に隠されているのであり、それを「見たい」というハーディは、〈有〉としての〈自然〉を「隠れなきこと」として開示しようとしている。
- (b) 〈有〉から引き離された単なる「仮象世界」と全く同じ世界が、『ジュード』の物語世界として再現されている。それは、〈ピュシス＝自然〉の本来の意味を最初に歪曲し隠蔽したプラトニズムとキリスト教思想によって形成される世界である。
- (c) プラトンから中世キリスト教に至る思想的潮流は、『ジュード』において描かれている仮象世界に充満している。それはジュードの生涯につきまとい、彼を悲劇へと導く要因となっている。

以後、上に挙げた諸見解をもとに『ジュード』における真の悲劇について考える。

4. 『ジュード』における真の悲劇

4.1. 仮象世界の住人ジュード：知と宗教の都への憧れ

ジュードは幼い頃からクライストミンスターに憧れを抱き、神に仕える聖

職者という地位を得るために必要な「知性」を熱望している。この頃のジュードはいわゆる仮象世界の住人であり、仮象の内に現れ出る〈ピュシス＝自然〉を経験しうるはずもない。ある日ジュードは、憧れの都から吹いてくる風に乗ってやって来る「かすかな、音楽のように響く鐘の音や街の声」(21)を聴く。この実際には聞こえるはずもない音楽を「知的飛躍 (mental leap)」

(21)を行うことによって聴いている彼は、その間「自身の肉体の居場所に全く気づかなくなっていた」(21)。音楽とは「魂の奥深くにしみこみ、力強く魂をつかむものである」(2:249-50)ならば、このジュードの姿は、プラトンの「知を求める者」そのものである。その後何年も勉学に耽るジュードはある時、「多神教的空想」(29)に心を奪われ、「異教の書」ばかり読んできたかつての行いを回顧し、そのような異教的思想や書物とクライストミンスターとの間には「わずかな調和もないようだ」(30)と感じるようになる。その結果彼は、「今では慣れ親しんだものとなっていたイオニア方言を捨て」、「教父の文学を知ることになった」(30)。こうしてジュードは、中世的性質を色濃く帯びたクライストミンスターに至る思想的道程を、逸れることなく辿っていく。⁹⁾

4.2. アラベラ：ジュードの魂を肉体へ引き戻す「現実界＝現象界」の「雌の動物」

しかしアラベラ (Arabella) と出会うことによって、ジュードは「知を求める者」の道を大きく逸脱することになる。彼女の肉体から染み出る性的魅力は、ジュードの視線を釘づけにする。彼の「知的飛躍」を停止させ、性衝動を目覚めさせるアラベラは、「実体のある雌の動物」(34)であると語り手は述べる。このアラベラの「実体」とは、プラトンの現実界＝現象界における肉体の表象であると考えることができる。

プラトンによれば、性愛の悦びやその欲望は「知識と善を追い求める魂にとって有害で」あるがゆえに「不必要な」欲望である (2: 427)。しかし性欲は、数ある欲望の中でも「最大にして最も激しい欲望」である (4: 351)。このよ

うな激しく力強い欲望にジュードの魂は捕えられ、肉体に引き戻されてしまう - “In short, as if materially, a compelling arm of extraordinary muscular power seized hold of him - something which had nothing in common with the spirits and influences that had moved him hitherto” (37-38)。「異常なほど力強い＝肉体の」力は、彼の「理性＝靈魂」など構いもしない。この力は、肉体を離れて飛躍しようとするジュードの魂を地上に叩きつける力であると考えられる。

4.3. “Christ-minster” : ジュードが陥る「深淵」

アラベラとの一件以来、かつて彼を「知的飛躍」へと導いた心地よい「音楽」は、「単一の音へと弱まり・・・そして止んでしまった」(46)。だがジュードは再び学問への情熱を燃やし始め、クライストミンスターへ向かう。そこで彼を迎えるのは「古い中世の大建築物」、そして教会の礼拝で流れる詩篇(Psalms)の一節(“Wherewithal shall a young man cleanse his way?”)である。

「これまで超自然的(靈的、神的)なものによって育まれてきた」(75)ジュードはこの詩篇の中に神の慈悲を感じ、それによって、かつてアラベラへの肉欲に溺れた自身は浄化されると考える。この詩篇こそ、ジュードの魂を再び肉体から引き離し、彼の「知的飛躍」を促す音楽であると考えられる。

しかしこのような「知的飛躍」も、彼の「知を求める者」としての成就を手助けするものではない。大学への入学の望みが全て潰え、彼は「挫折を自覚したことによる地獄」(101)に陥る。この挫折の原因は、「中世の宗教(思想)は・・・朽ち果てている・・・ということを認めていなかった」だけでなく、「彼の敬愛している多くのものに対して、現代の論理や先見性が敵意を抱いていることを知らなかった」(69)ジュード本人にある。さらに語り手は、彼の挫折を「深淵(abyss)」(101)と表現する。この言葉の意味を考える際に思い出されるのが、ハイデガーの言う「深淵(chasm)」である。つまりジュードが陥る「深淵」とは、〈ピュシス〉の本来の意味を誤り伝えたプラトンに始まる知的伝統を囲い込み、プラトン哲学を神の存在証明として利用したキリスト教の住処である「中世の - 修道院(Christ-minster)」そのも

のであり、そのことを知るはずもないジュードは、必然的にその中に陥れられるのである。

4.4 スーの「戦い」：〈ピュシス〉を求める「情熱」

「挫折」からジュードを救い出し、以後の彼の人生に決定的な影響を与える人物がスー（Sue）である。挫折の後、ジュードは聖職者としての「愛他的生活」という「新たな観念」を掲げる（103）。この「観念」の前に立ちはだかるのがスーである。

プラトンから古代教父に至る思想的伝統を継承する「キリスト教の都市」クライストミンスターの中へ「異教徒の荷物を携えて入ってきた」（77）スーは、「クライストミンスターの中世思想は・・・捨て去られなければならない」（120）と言い放つ一方で、自身を「近代的」でも「中世的」でもなく、「古代的」であると考えている（108）。さらに彼女は、神学を学ぶことによって「僕はより高いものを欲している」というジュードの言葉を受けて、「私はより広く、より真なるものを欲している」と主張する（121、傍点筆者）。⁷彼女の考えに少なからず影響を受けるジュードはやがて、「〈自然〉が人間の洗練された情緒を嘲笑い、人間の抱く大志などに関心はないのだと、ますます頻繁に悟る」（141）ようになる。彼はスーと関わることによって、それまで信じて疑わなかったキリスト教世界における絶対的真理が、もはや自身の心を支配できなくなっていると感じ始めるのである。その後ジュードは、「真正なる本性（自然）」（76）の大いなる力によってスーのもとへ引き寄せられていく。彼女に対するジュードの性愛は、彼がアラペラと交わした性愛とは本質的に異なる。「性愛をその最高の状態においても弱点と見なし、最悪の状態においては地獄の責め苦と見なす宗教の兵士なり下僕になろうとすることは、自身にとっては紛れもなく矛盾することだ」（172）という考えに至るジュードは、遂に神学書を全て焼き払い（173）、スーと同棲を始める。

スーはジュードに、「私たちの自然なる（本来あるべき）結婚を法律に基づくものにすること」（213）は人間の「情熱を破壊する」（215）ことだと話

す。この時ジュードは彼女を、「キリスト教国の住人ではなく・・・かつて書物で読んでいた・・・壮大なる古代文明の女性」(214)として見ている。彼女の言う「情熱」とは、古代ギリシア人たちの「〈有〉の暴露を求める情熱」(IM 112) のことであると考えられる。この「情熱」と共に社会の慣例に「抵抗する」(171) スーは、自身が「自然なる状態 (natural state)」(171) にあることをジュードにほのめかす。⁸ ジュードの中でギリシア人たちの姿が、〈有〉の「隠れなきこと」を求める人間＝現存在の「情熱」を抑圧しようとする社会と戦うスーの姿に重ねられる。彼女にとって事物の本質や人間の本性と、一般の民衆が現実だと思い込んでいる仮象世界における社会の慣例との間には、何一つ共通性がない。そして遂にジュードは、彼女を「〈有＝自然〉が無傷のままにしておこうとした人間存在」(271)⁹ だと考えるようになる。人間を突き動かす根源的な「情熱」と共に仮象世界に対して戦いを挑む彼らは、スー自身が言うように、「古代ギリシアの喜びに戻った」、そしてプラトン以降「2,500 年という時間が人類に教えてきたこと」、つまり〈有〉の本来のあり方を偽り隠し続けてきた哲学を「忘却の彼方に追いやった」(235) のである。

4.5 スーの敗北、ジュードには「聞こえない＝不条理な」音楽

しかしリトル・ファーザー・タイム (Little Father Time) の自殺を機に、スーに決定的な変化が起こる。彼女はこの事件を、社会の慣例に逆らい、より本質的な性愛と共に「完全なる結びつき」(267) を押し通そうとする者が負うべき制裁であると考えようになる。これまで信じてきたものを全て否定されるような事態に陥ったスーは絶望のあまり、“I said it was Nature's intention, Nature's law and *raison d'être* that we should be joyful in what instincts she afforded us – instincts which civilization had taken upon itself to thwart. What dreadful things I said!” (268) と叫ぶ。〈有＝自然〉が人間に与える「本性」によって自身が(現存在として) 有ることに歎びを感じていたスーは、その本性を妨げる役を自ら買って出る文明＝仮象世界によって挫折へと追いやられる。自

身の真正なる存在とは全く相容れないとしてこれまで反発し、輕蔑さえしてきた神に「従わなくてはならない」(271)と嘆き、「私は打ち負かされた」とつぶやく彼女には、「もはや戦う力など残されていない」(271)のである。「彼女が以前のスーでないことに気づき始めた」(271) ジュードは彼女に、
“You used to say that human nature was noble and long-suffering, not vile and corrupt, and at last I thought you spoke truly. And now you seem to take such a much lower view!” (273) と訴える。今や彼にとって「真理を語って」いるのは宗教言説などではなく、そのようなものを否定し、本来の高尚なる人間の有り方（現存在）を彼に論じたスーなのである。しかし彼の声がスーの心を動かすことはない。ある日の夜遅く、教会に忍び込んで十字架の下でむせび泣くスーの姿を見て深く傷ついたジュードは、自身がかつて「教会に対して抱いていた僅かな愛情や敬愛の念を残らず排除した」後で「突然正反対の方向に向きを変えてしまう」彼女を非難する(278)。すると彼女は次のように答える —
“Ah, dear Jude; that's because you are like a totally deaf man observing people listening to music. You say ‘What are they regarding? Nothing is there.’ But something is” (278)。スーの言う「音楽」とは、かつてクライストミンスターに憧れていたジュードが耳にした音楽である。今やそのような音楽は間違いだと悟っているジュードにとって、スーが「ある」と訴える音楽はこの上なく「不条理な (absurd)」もの、つまり「(ある所から) 離れて - 耳が聞こえない (*ab + surdus*)」(“Absurd,” def. 1) ものである。仮象世界とはただの仮象の世界であると捉える観念から離れているジュードには、スーの聴く音楽は全く「聞こえない＝不条理な」のである。こうして彼らは「互いの境遇を取り替えて」(274) しまう。その後、「神の名の下での結婚」の契約を交わした相手である（と今や信じている）フィロットソン (Phillotson) のもとへ戻ったスーは、「諸物をそれ自体として見ることの無い世間を満足させるため」(285) に彼と再婚する。一方ジュードは、キリスト教社会に屈したことによって、もはや根源的な力を携えてその社会で生きる＝戦う意味を失い、失意のうちにその生涯を終えるのである。

5. “Jude the Obscure[d]”: 隠される〈有＝自然〉、早すぎた「知」

既に述べたように、〈有〉は現れ出ると同時に仮象のただ中にある。ゆえに〈有〉を問い続ける古代ギリシアの思想家たちは、「仮象から〈有〉を引き剥がし、仮象に対してそれを守らねばならなかった・・・この戦いに耐えることによってのみ、彼らは有るものから〈有〉をもぎ取り、有るものを持続性と隠れなき状態に至らせた」(IM 111)のである。スーはまさにこのギリシア人の戦いを再現する。つまり彼女は、〈有＝自然〉、そして現存在——その根本的な性質＝本性を〈有〉から獲得する人間存在——を、仮象（あるいは〈有〉を隠蔽する思想）に対して守ろうとするのである。かつて文明の力によって挫折を強いられたジュードを救い出したスーの「知性」は、「以前に彼が敬意を払っていた因習や形だけのものに、まるで輝く光のように浴びせられた」(272)。この彼女の「知性」とは、アイデアを目指す「魂の案内人」などではなく、より本質的で根源的な〈真理＝有〉を求める者の知性であると考えられる。⁹⁾ ジュードは彼女に感化され、彼女と共に戦う。しかしスーの敗北に失望したジュードは、戦いに決着をつけられない状態、つまり仮象と〈有〉の間を揺れ動く「はっきりしない、曖昧な (obscure)」状態に陥り、最終的に〈有＝自然〉を真に問う者としての彼の現存在は「隠蔽されて (obscured)」しまうのである。このような二重の意味——Jude the Obscure[d]——は、まさにジュードの悲劇の真髄を表しているのである。

「戦い」が失敗に終わろうとする際、ジュードはスーに対して次のように言う——「おそらく世の中は、僕たちのような試みがまかり通るほど啓発されていないのだろう」(279)。さらにスーがフィロットソンの妻として彼に従うことを新訳聖書にかけて誓い、彼にその身を捧げたことを知らされたジュードは、絶望のうちに次のような言葉を吐く——“As for Sue and me when we were at our own best, long ago – when our minds were clear, and our love of truth fearless – the time was not ripe for us! Our ideas were fifty years too soon to be any good to us. And so the resistance they met with brought reaction in her, and recklessness

and ruin on me!" (318)。興味深いことに、『ジュード』が出版されてから 50 年後は、ちょうどハイデガーが『形而上学入門』と共にその革新的な存在論を世に放っていた時期と重なる。¹¹⁾ このことから次のような考えが浮上する。つまり、ジュードとスーによる「試み」——それが通用するには 50 年早すぎる試み——とは、〈有＝自然〉の開示というハーディ自身による試みでもある。そしてそれは、50 年後にハイデガーによって呼び覚まされた「存在への問い」、つまり〈有〉の隠れなきことを求める古代ギリシア人たちの「戦い」に重なっていく。ジュードとスーの「知性」、「真理への愛（真理を求める心）」がいかに「恐れを知らない」ものであったとしても、彼らの「戦い＝試み」がたとえ〈真理＝有〉を求めるものであったとしても、「時代」が、つまり〈有＝自然〉という語の根源的な意味を無視してきた旧来の思想の歴史が、それを受け入れることはない。その結果、スーには「反動」が、そしてジュードには「破滅」が降りかかるのである。

『ジュード』の真の悲劇は、2,500 年にわたって〈有＝自然〉の本来の意味を歪曲し無視し続けてきた思想的因習を打破する革新的な「知性」が、その因習に破れ、隠蔽されてしまうことの中に見出される。この結論を得るために我々は、『ジュード』という小説が、主人公たちの「戦い」、つまり〈有＝自然〉の「隠れなきこと」を求める戦いを描き出した小説であるということを理解しなければならないのである。

注

*本稿は日本ハーディ協会第 52 回大会（2009 年 10 月 31 日、於立教大学）における口頭発表原稿をもとに加筆修正したものである。

1) ピニオン (Pinion) は、ハーディがオクスフォード (Oxford) をクライストミンスターと呼んだ時点で「明らかに（キリストの）磔を思い描いていた」こと、「受難者」としてのジュードとスーが「殉教の地点を印づける十字架が歩道に刻まれた場所で」初めて会うことの意味を強調し (111)、ジュードの人生の結末はキリストの受難の反復であると示唆する。この見解を受けてピーターソン (Peterson) は、ジュードが「殉教と磔の場所」であるクライストミンスターに帰って

来て、三人の子たちの死をその「予兆として目撃」する(223)と述べている。

2) 例えばハーディとその思想の類似性がしばしば指摘されるショーペンハウアー(Schopenhauer)は、「全知力を直感に捧げ・・・現前する自然物を静かに観照することによって意識全体を満たす」ことで、人間は「アイデア、すなわち永遠なる形相、意志の直接的な客体性」を認識できると説く(178-79)。しかしこの「アイデア=客体性」がハーディの求める「真なるもの」とは根源的な意味において異なることは、もはや明らかである。ハイデガーの言うように、ショーペンハウアー的「意志」の客体性もまたアイデアと同様、〈ピュシス〉がもはや「複写と模倣に対する原型へと墮落」した結果であり、ゆえにそれは、「単に視覚的なものにすぎない」(IM 66)。

3) この「有るもの」を「ピュシス」と名づけた思想家として、パルメニデス(Parmenides)が挙げられる。このことは、パルメニデスが唯一残したとされる著作(諸断片)に、『ピュシスについて』(On Nature [ΠΕΡΙ ΦΥΣΕΩΣ])という題がつけられていることから明らかである。この中でパルメニデスは、二つの「道」を示す。一つは「ある、そしてあらぬことは不可能である」という道、そしてもう一方は「あらぬ、そしてあらぬことは必然である」という道であるが、後者は「全く知ることのできない道」である。なぜなら人間は「あらぬことについて知ることもできないければ、それを言葉で述べることもできないから」である(6-7)。「ある」という道がそれに「従っている」ところの「真理=アレーティア(truth=alētheia [ΑΛΗΘΕΙΑ])」という語における「隠れなきこと」という意味を強調するのがハイデガーである——「あるものがそれとしてある限り、それは隠れなきこと(アレーティア)の内にそれ自体を立てるのである・・・真理のギリシアの本質は、ピュシスとしての〈有〉のギリシアの本質と一体となつてのみ可能となる」(IM 107)。このように〈ピュシス〉と「真理=アレーティア」の間の本質的な関係を重要視するハイデガーにとって、「真理は〈有〉の本質に属する」(IM 107)のである。

4) ハイデガーによれば、プラトン以前のギリシアの思想家にとって、「〈有〉はその本質を仮象と共に有している」(IM 108)。

5) 古代教父と中世キリスト教との密接な影響関係を強調するドーソン(Dawson)によれば、中世キリスト教が何世紀にもわたって持ち続けた主要問題とは、「どうすればこの(教父より受け継いだ)学識を保持し、またそれに同化することができるのか」(31)ということであった。チャドウィック(Chadwick)の言うように、1～2世紀の初期キリスト教哲学にとってプラトン主義言説は、多神教神話に対抗して理性的反論を行うための「計り知れないほど貴重な兵器庫であった」(5)。

この頃のキリスト教哲学において中心的人物であったクレメンス（Clement）は、聖書の権威がプラトン主義の多くを支持するものであると考えプラトニズムの需要を徹底した（45）。またオリゲネス（Origen）は、世界＝宇宙がより「高い」ところと「低い」ところに、「思惟」と「感覚」に、「霊」と「肉」に分けられているというプラトニズムを当然のごとく受け入れ、「無限の創造主と有限の被造物」との間に、「深淵（gulf）」を生み出そうとする（83）。この「深淵」はまさに、ハイデガーの言う「深淵」に相当する。4～5世紀の西方において「キリスト教徒のプラトン」と呼ばれたアウグスティヌス（Augustine）にとって、「全ての事物は、神の精神の内にあるアイデアの似像である限りにおいてのみ存在する。そしてそれらは・・・神の完全性の不完全な写しである」（Armstrong 213）。このように概観しただけでも、初期キリスト教哲学とプラトニズムとの密接な関係性が中世キリスト教の形成に絶大な影響を及ぼしていることは容易に理解できる。以後本稿において強調されるクライストミンスターの中世的性質は、プラトニズムやそれ以前の古代ギリシア思想との関係と共に、ジュードの悲劇に欠かすことのできない要因となっている。

6) ソクラテスは「古代の神々の神話（多神教神話）は虚偽であり、人間を墮落させるものであると考えていた」（Chadwick 12）。さらに初期キリスト教哲学がソクラテス・プラトンの思想と密接な関わりを持つようになった根拠の一つが、多神教神話に対抗するためであるということを併せて考えれば、この時期のジュードが「多神教的空想」に基づく行為に疑問を抱き、「異教の書」から「教父文学」へと勉学の方針を切り替えることは、至極当然のことであると考えられる。

7) この二人のやりとりの中に、両者の思想の根本的な差異が見られる。「高いもの」を求めるジュードの思想は、世界＝宇宙を「高い」ところと「低い」ところ（アイデア界と仮象世界）に分けるプラトニズム及びその思想を受容するキリスト教思想（神の世界と被造物の世界）を前提としており、スーの思想は、プラトニズムやキリスト教哲学によって「異教」とされる古代ギリシア思想における「根本の問い」、つまり「最も広く、最も深い問い」に基づいていると考えられる。

8) 「情熱」、「自然なる状態」というスーの言葉について考える際に思い出されるのが、以下のハイデガーの一節である — “In Christian thought, the human being's “natural state” means what is bestowed upon humans in creation and turned over to their freedom. Left to itself, *this “nature,”* through the passions, brings about the total destruction of the human being. For this reason “nature” must be *suppressed*. It is in a certain sense what should not be”（Pathmarks 183）。この一節における「自然なる状態」とは、真に現れ出ることとしての人間存在の真正なる状態を表していると考えられる。キリスト教思想において〈自然〉は、

「情熱」を通して「人間の完全なる破壊を引き起こす」ものであると考えられているが、この「情熱」こそ、古代ギリシア人たちの「〈有〉の暴露を求める情熱」に他ならない。

9) この存在は、古代ギリシア人たちが求める人間存在、つまり〈有〉に直接帰属するところの「現存在」として理解されるべきであろう。

10) スーの「知性」、そしてそれが放つ「輝く光」は共に、〈有＝自然〉と密接に関係していると思われる。ハイデガーによれば、真に「現れ出る」こととしての〈ピュシス〉は「輝き出ること」(IM 106)、「光の中に立つこと」(IM 107)を意味する。さらに「知ることは、真理の内に立ち上ることを意味する。真理とは(ピュシスとして)有るものが開く＝現れ出るということである。したがって知ることは、有るものの開くことの内に立ち、それに耐えうるということである」(IM 23)。言うまでもなく、これは単に知識を持つということとは全く異なる。

11) この時期は、『形而上学入門』の講義がフライブルク大学で行われた 1935 年から、その講義のテキストが最初に出版された 1953 年までの 18 年間のほぼ中間に位置している。

Works Cited

- Armstrong, A. H. *An Introduction to Ancient Philosophy*. 1947. London: Methuen, 1949.
- Chadwick, Henry. *Early Christian Thought and the Classical Tradition: Studies in Justin, Clement, and Origen*. Oxford: Clarendon, 1966.
- Dawson, Christopher. *Mediaeval Religion and Other Essays*. London: Sheed, 1934.
- Hardy, F. E. *The Life of Thomas Hardy: 1840-1928*. 1962. London: Macmillan, 1975.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. Ed. Norman Page. New York: Norton, 1978.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. Ed. Scott Elledge. 3rd ed. New York: Norton, 1991.
- Heidegger, Martin. *Introduction to Metaphysics*. Trans. Gregory Fried and Richard Polt. New Haven: Yale UP, 2000.
- . *Pathmarks*. Ed. William McNeill. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Parmenides. *Parmenides of Elea: Fragments*. Text, trans. and introd. David Gallop. Toronto: U of Toronto P, 1984.
- Peterson, Carla L. *The Determined Reader: Gender and Culture in the Novel from Napoleon to Victoria*. New Brunswick: Rutgers UP, 1987.

Pinion, F. B. *Thomas Hardy: Art and Thought*. 1977. London: Macmillan, 1978.

Plato. *The Dialogues of Plato*. Trans. B. Jowett. 4th ed. 4 vols. Oxford: Clarendon, 1953.

Schopenhauer, Arthur. *The World as Will and Representation*. Trans. E. F. J. Payne. Vol. 1. New York: Dover, 1969.

Owen Graye's Desperate Remedy

MASAKI YAMAUCHI

Thomas Hardy's *Desperate Remedies* recounts the frantic redress of Owen Graye. Owen, whose prospects are greatly diminished by his father's sudden death at the beginning of the story, does not complete his apprenticeship as an architect. In fact, his knowledge of this profession is not "greater at the end of two years of probation than might easily have been acquired in six months by a youth of average ability — himself, for instance, — amid a bustling London practice" (20). The story begins with Owen who is beset by the debts of his father and younger sister, Cytherea, who is unemployed. His desperate remedy is to marry Cytherea to someone with money in order to improve the present situation. He tries to exercise his paternal rights as Cytherea's only guardian who can choose her marriage partner. Cytherea faces the dilemma of marrying Edward Springrove, the man she loves or of accepting a mercenary marriage to Aeneas Manston, who has the social position and financial power to save her brother. Taking Hardy's novel as its point of reference, this paper examines a marriage of convenience, compelled by a guardian in a patriarchal society.

1

What happens in the act of a woman's exchange in a marriage? What does it mean when a culture should require that the female body be exchanged in this way? Claude Lévi-Strauss, who regards woman as a privileged commodity within cultures, explains a woman's exchange as follows:

There is no need to call upon the matrimonial vocabulary of Great Russia, where the

groom was called the 'merchant' and the bride, the 'merchandise' for the likening of women to commodities, not only scarce but essential to the life of the group, to be acknowledged. (110)

This idea that a woman equals commodity is also described in Hardy's *The Woodlanders*. Melbury makes his daughter Grace marry a richer man than Winterborne.

"I[Grace], too, cost a good deal, like the horses and wagons and corn!" she said, looking up sorrowfully.

"I[Melbury] didn't want you to look at those; I merely meant to give you an idea of my investment transactions. But if you do cost as much as they, never mind. You'll yield a better return."

"Don't think of me like that!" she begged. "A mere chattel" (88)

Moreover, Lévi-Strauss describes a woman in a marriage system as a commodity in the following way:

The total relationship of exchange which constitutes marriage is not established between a man and a woman, where each owes and receives something, but between two groups of men, and the woman figures only as one of the objects in the exchanges not as one of the partners between whom the exchange takes place (115).

This means that Grace is exchanged between two men: Melbury who tries to get a higher social status and Fitzpiers who marries for money. In this novel, the male characters regard the female as a commodity to circulate within the system of exchange.

In *Desperate Remedies*, in order to "drop from the sight of acquaintances, gossips, harsh critics, and bitter creditors of whose misfortune he was not the cause" (18), Owen

makes full use of Cytherea as a marketable commodity. His only paternal privilege is to influence the choice of her marriage partner. Her marriage is Owen's desperate remedy.

In the Victorian era, freely chosen love was gradually generalized; however, Hardy frequently describes Cytherea as only a "child" who needs paternal protection. For example, she "look[s] with children's eyes at any ordinary scenery" (22), and is "too girlish-looking" (57). She has "very infantine thoughts and actions" (55); moreover, her movements are "childish" (69). Therefore, Miss Aldcliffe treats her "as if she were a mere child or plaything" (73). The reader is much impressed with the idea that Cytherea is "a docile child" (92), so he or she regards that Owen, a substitute for her father, bears a social responsibility for her, including the choice of her marriage partner. Moreover, the contrast between Cytherea's optimistic reaction to her father's death and Owen's realistic one makes her immaturity clear.

2

There is one episode where Cytherea's social value is made clear. Desiring her own income, she places an advertisement in a newspaper:

"A YOUNG LADY is desirous of meeting with an ENGAGEMENT as GOVERNESS or COMPANION. She is competent to teach English, French, and Music. Satisfactory references.

"Address, C. G., Post Office, Creston." (22)

In this advertisement, Cytherea emphasizes the cultural attainments — her knowledge of languages and music — that she has derived from a respectable social position. Cytherea has not been born into service but forced into it by the financial thoughtlessness of her father. However, when no offer of employment arrives, she rewrites the advertisement, excluding them, indicating instead that she will accept a "very moderate" salary and that

"[s]he is a good needlewoman" (41). Finally, she inserts an advertisement to work as an "[i]nexperienced" (53) lady's maid.

These three advertisements clearly show Cytherea's declining sense of her social worth. In other words, they reflect her and Owen's acknowledgement of her low value as a social commodity. Owen, therefore, leads her to a marriage. In Victorian times, marriage was closely related to class distinctions and financial power; it is important, thus, not to strictly apply Lévi-Strauss' notion that 'exchange produces value' but rather the Victorian notion that 'value produces exchange.' In *The Woodlanders*, when Melbury sees the highly educated Grace, he thinks that her predetermined marriage to the low-ranked Winterborne wastes her, and he finally makes her marry Fitzpiers, who has a higher status. In other words, her father judges that her education increases her exchange value in the marriage market. Melbury, thus, exchanges her with a more valued marriage partner.

In *Desperate Remedies*, once Owen recognizes the decreasing value of his sister in each advertisement, he favors the association of Cytherea and Springrove. Owen's approval of their relationship results from his understanding that Cytherea the female does not have the social values as a commodity in the society until she is circulated among her marriage partners. He initially does not consider Springrove suitable because he regards the latter as "a man of very humble origin" and "a little the worse" (26). Owen, who has had "a large share of his father's pride, and a squareness of idea" (19), believes that "humanity, so far as he had thought of it at all, was rather divided into distinct classes than blended from extreme to extreme" (19). Therefore, these advertisements alter Owen's view of the bond of Cytherea and Springrove. Despite the fact that Springrove belongs to a lower class, he is decently employed; thus, by permitting him to marry his sister, Owen finds one desperate remedy for poverty.

However, Springgrove's engagement to his cousin Adelaide prevents him from marrying Cytherea. To make matters worse, because of the sickness of Owen's leg, he cannot work satisfactorily and, therefore, he is obliged to live without any income. What is important in such a situation is that when Manston, a land steward, makes a timely appearance at Miss Aldcliffe's mansion where Cytherea is working as her companion, he begins a whirlwind and passionate courtship with Cytherea. Meanwhile, Owen's injured leg becomes progressively worse. Owen's impaired leg symbolizes his loss of social and economic status. Richard Nemesvari argues that "his loss of social and economic status has severely curtailed his leverage here as well. . . . Cytherea thus becomes the locus of Owen's one chance to reassert his patriarchal power" (35). As Nemesvari points out, Cytherea's marriage is an unparalleled opportunity for the establishment of Owen's authority; conversely, the economic poverty caused by his sickness strengthens rather than weakens his influence over Cytherea when Owen guides his sister's choice of husband. Owen sees profit in making her marry Manston. Significantly, Owen's trouble is not a narrative event but "a device used to put his sister Cytherea under pressure to 'tie the knot' with Aeneas Manston" (Neill 4). He explains his ailment as "that mysterious pain which comes just above my ankle sometimes" (156) in the first place. In another letter to Cytherea, he describes it as "rheumatism" (223), and then he informs her that "doctors find they are again on the wrong tack. They cannot make out what the disease is" (224). Finally, he writes to her, "three practitioners between them have at last hit the nail on the head, I hope. They probed the place and discovered that the secret lay in the bone. I underwent an operation for its removal three days ago" (225). His explanation of his sickness is "no explanation at all" (Neill 37-8). It is difficult to grasp what is troubling him and explain the removal of an unspecified bone in a surgical operation. The important thing here is that the financial crisis of the ailment requires the marriage of Cytherea and Manston. Even

though his surgical operation goes well, his recovery is slowed until she decides to marry Manston. Only Cytherea's engagement to Manston expedites Owen's recovery. Thus, it speeds up as Owen re-establishes his paternal influence over his sister's choice of a marriage partner.

Owen's ailment places onto Cytherea the responsibility "[t]o provide herself with some place of refuge from poverty, and with means to aid her brother Owen" (232). The following words drive her to accept Manston: "you[Cytherea] might benefit your sick brother if you were Mrs. Manston" (225) and "Consent to be my[Manston's] wife at any time that may suit you . . . and you shall find him[Owen] well provided for" (226). Cytherea's marriage is not a matter of her own desire or affection but a matter of interest between two men, Manston and Owen. As the narrator points out, Owen has a "worldly policy in the subject of matchmaking which naturally resides in the breasts of parents and guardians" (297). He can gain security and establish a paternal right in exchange for Cytherea while Manston comes to possess Cytherea. Moreover, "Miss Aldcliffe made it appear more clearly than ever that aid to Owen from herself depended entirely upon Cytherea's acceptance of her steward" (227). Like Alec d'Urberville who persistently woos Tess by supporting her family materially in *Tess of the d'Urbervilles*, Manston becomes a guarantor of Owen's debt and offers him a wheelchair. In doing so, Manston gradually implants in Cytherea's mind her responsibility to marry him. For Cytherea, "there were two courses open: her becoming betrothed to Manston, on the sending Owen to the County Hospital" (228). She finally submits to marrying Manston as the only way of attaining sufficient means both to maintain herself and to provide medical care for Owen, since she comes to the conclusion that "[s]he would do good to two men (Owen and Manston) whose lives were far more important than hers" (233).

"Why do I marry him?" she said to herself. "Because Owen, dear Owen my brother, wishes me to marry him. Because Mr. Manston is and has been, uniformly kind to Owen, and to me. 'Act in obedience to the dictates of common sense,' Owen

said, 'and dread the sharp sting of poverty. How many thousands of women like you marry every year for the same reason, to secure a home, and mere, ordinary, material comforts, which after all go far to make life endurable, even if not supremely happy.' (240-1)

Cytherea's marriage for money leads to "the clear, honourable, and only sisterly path which leads out of this difficulty" (228) and enables her to protect "Owen — her name — position — future" (251). After their engagement, Owen lives with Manston. This fact makes it clear that Owen now belongs to the community that he has desired since his father's death through the exchange of his sister. In addition to this, his leg gets well, as if it completed its role in the marital transaction. "Contrary to the opinion of the doctors, the wound had healed after the first surgical operation, and his leg was gradually acquiring strength" (243).

4

The conflict between bonds formed from real affection and those from material interest arises at the wedding of Cytherea and Manston at which Springrove suddenly appears. Cytherea reaffirms her genuine love for Springrove with which Owen cruelly remonstrates:

"Many a woman has gone to ruin herself . . . and brought those who love her into disgrace, by acting upon such impulses as possess you now. I have a reputation to lose as well as you. It seems that do what I will by way of remedying the stains which fell upon us, it is all doomed to be undone again." (251)

The cancellation of Cytherea's marriage would impede Owen's frantic efforts to establish

his own patriarchal power, so he obliges her to marry Manston at all costs. However, she protests loudly against a marriage of convenience:

"Yes — my duty to society," she murmured. "But ah, Owen, it is difficult to adjust out outer and inner life with perfect honesty to all! Though it may be right to care more for the benefit of the many than for the indulgence of your own single self, when you consider that the many, and duty to them, only exist to you through your own existence, what can be said? What do our own acquaintances care about us? Not much." (251)

Cytherea protests not against her brother but against the social norm that requires her obedience, whatever her real feelings are. She accepts the mission of protecting her brother's future. Most importantly, Owen ignores her "status within the particular ambiguity of being at the same time objects of symbolic exchange and also, at least potentially, users of symbols and subjects in [herself]" (Sedgwick 50). Because Owen's concern with getting his sister well married is shown to be culpable, he recognizes that "the achieving of marriage . . . is to be the primary concern of women's lives, and yet it is to be brought about apparently without intention, without consciousness" (Boumelha 246) by Cytherea's family. Therefore, he regards her not as a person but as a generator of money. Since "[f]amilies were often no more sensitive to their daughters' feelings" (Gillis 257), Owen can only gain from her marriage; he is not losing his sister, but winning a brother. Owen's failure is to invest Cytherea as his convertible asset in the triangular transaction between two men of the possession of a woman, in utter disregard of her feeling. Due to the result of his bad speculation, Owen and Cytherea are placed a more awkward position.

The possibility that Manston's wife, so far assumed dead, is actually alive arises in the village just after their wedding. If true, this fact would prove to be absolutely fatal to Owen and Cytherea. As a woman who has had sexual relations with a married man,

Cytherea's social value would plummet, as would the social standing of her brother. In order to protect her social value, Owen desperately tries to impede her honeymoon with Manston. Hearing that Manston's wife is still alive, Owen asks himself whether he was not partly to blame for what happened:

Had his defenceless sister been trifled with? that was the question which affected him. . . . Was it not true, as Edward had hinted, that he, her brother, was neglecting his duty towards her in allowing Manston to thrive unquestioned, whilst she was hiding her head for no fault at all? (301)

Thus, Cytherea's only guardian, Owen, neglects "his duty towards her." He thus loses his paternal social power. Consequently, it is natural that his feelings toward Manston change from that of a good marriage partner to that of a bigamist: "If I could only bring him [Manston] to ruin as a bigamist — supposing him to be one, I should die happy. That's what we must find out by fair means or foul — was he a wilful bigamist" (303).

The marriage of Cytherea including the interest between Owen and Manston is not as complex as that of Springrove. He has been engaged with his cousin Adelaide for a long time, but he forms a love relationship with Cytherea. At first glance, Springrove, Cytherea, and Adelaide are involved in a love triangle. However, the situation is more complicated because of the fire caused by his father's carelessness. Manston, who loses his wife in the fire, intervenes the love triangle to get Cytherea. He makes Miss Aldcliffe persuade Springrove to marry Adelaide in exchange for an exemption for his father's liabilities. The marriage of Springrove who decides to marry Adelaide for debt redemption is similar to that of Cytherea who requires considerable self-sacrifice for Owen. However, what is important here is that Springrove's marriage implicitly requires the exchange of Cytherea between Springrove and Manston. Springrove's promise of marriage leads to his break with Cytherea while Manston seizes a good opportunity to

possess her by forgiving Springrove and his father their debt. Springrove's marriage also includes an exchange of intimacy for money. Walter E. Houghton presents G. R. Drydale's view of Victorian marriage, which was written in 1854:

A great proportion of the marriages we see around us, did not take place from love at all, but from some interested motive, such as wealth, social position, or other advantages; and in fact it is *rare* to see a marriage in which true love has been the predominated feeling on both sides. (original italics 381)

Both Cytherea's and Springrove's respective marriages, like many Victorian marriages, are governed by their families' mercenary interest rather than their own feelings. Ironically enough, Adelaide abandons Springrove and marries an older farmer who has more money.

It is important to note that marriages formed on the basis of affection and love gradually increased against marriages of convenience. The right to marry by choice reinforced the principle that women should be granted the same rights, including freedom of divorce and sexual autonomy, as men (Perkin 215-8). In spite of the fact that Cytherea and Springrove love each other, they nobly sacrifice themselves to the demands of their families. However, it is significant to note that they finally unite in *Desperate Remedies*. The importance of the triumph of a marriage of love over a marriage of convenience is effectively expressed by the words of a bell ringer who witnesses the wedding between Cytherea and Springrove. A marriage is not a matter of loss and gain, but a matter of feelings between the persons interested: "Money's money — very much so" (402).

Works Cited

- Boumelha, Penny. "A Complicated Position for a Woman: *The Hand of Ethelberta*" in *The Sense of Sex: Feminist Perspectives on Hardy*. Ed. Margaret R. Higonnet. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1993, pp.242-259.
- Gillis, John R. *For Better, For Worse: British Marriages, 1600 to the Present*. New York and Oxford: Oxford University Press, 1985.
- Hardy, Thomas. *Desperate Remedies*. Ed. Mary Rimmer. New York: Penguin Books, 1998.
- . *The Woodlanders*. Ed. Patricia Ingham. New York: Penguin Books, 1998.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. New Haven and London: Yale University Press, 1985.
- Lévi-Strauss, Claude. *The Elementary Structures of Kinship*. Trans. James Harle Bell and John Richard Von Sturmer. Ed. Rodney Needham. Boston: Beacon Press, 1969.
- Neill, Edward. *The Secret Life of Thomas Hardy: 'Retaliatory Fiction'*. Hampshire: Ashgate, 2004.
- Nemesvari, Richard. *Thomas Hardy, Sensationalism, and the Melodramatic Mode*. New York: Palgrave Macmillan, 2011.
- Perkin, Joan. *Women and Marriage in Nineteenth-Century England*. London and New York: Routledge, 1989.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Ed. Carolyn G. Heilbrun and Nancy K. Miller. New York: Columbia University Press, 1985.

Hardy's Misogyny: Reading *Jude the Obscure* as his Response to New Woman Fiction

JUN SUZUKI

According to Elaine Showalter, in the 1890s, syphilis or venereal disease was regarded as "the symbolic disease of the fin de siècle" (Yeazell 88). In her argument, Showalter has revealed the conflicting attitudes towards syphilis between contemporary feminist women writers and male writers. For the former, "lust was the most unforgivable of the sins of the fathers, and sexual disease was its punishment, a punishment unjustly shared by innocent women and children" (88). On the other hand, for the latter, "women are the enemies, whether as the femmes fatales, who lure men into sexual temptation only to destroy them, the frigid wives who drive them to the brothels, or the puritanical women novelists, readers, and reviewers who would emasculate their art" (88).

Above all, why did venereal disease attract so much attention in the 1890s? Showalter combines the disease with "the post-Darwinian theory of degenerescence, part of the new technologies of sex that opened up the domain of social control" (89). Concerning the problem of social control of sex, moreover, we also need to examine the connection between New Woman fiction and the British imperialism through eugenics. Actually, Angelique Richardson handles the theme in *Love and Eugenics in the Late Nineteenth Century* in detail. About the relationship between eugenic ideas of love in New Woman fiction and the British Empire, Sally Ledger also states: "the eugenics arguments which began to gather momentum in the 1890s were connected in a complex way with Britain's ongoing imperialist project, and many of the New Woman writers showed themselves to be complicit with this" (Ledger and MacCracken 35).

In this essay, I am also going to deal with the above-mentioned topic of the New

Woman writers' complicity with imperialism by investigating an idea of eugenics described in New Woman fiction. In this case, I will focus on one of Sarah Grand's short stories, "Eugenia" (1894), since Richardson calls it "a manual on eugenic sexual selection" (121). Thus, in the first place, I will clarify the New Woman writers' complicity with the British Empire in relation to their feminist political strategy of a "social purity movement." However, my final goal is not to confirm the feminist idea but to examine how contemporary male writers responded to New Woman fiction in their own work. Here I am going to deal with Thomas Hardy's *Jude the Obscure*, and examine how he felt towards New Woman fiction by analyzing both Arabella, one of the main female characters, and the structural pattern of Hardy's text, which is contrary to that of Grand's. As Shanta Dutta notes, Grand had sent a copy of her *The Heavenly Twins* (1893) to Hardy (175). Most probably, in writing *Jude*, Hardy was conscious of Grand's and other New Woman writers' literary works and their political campaigns; but for Hardy, the New Woman writers' political ideas such as "civic motherhood" and "rational female selection" (Richardson 49) were rather dubious ones; and he explored women's sexuality further instead. Therefore, it is quite possible that Hardy described "animal-like" Arabella in a misogynistic way on purpose in order to criticize the social discourses observed in New Woman fiction. Finally, I am going to show how Arabella subverts the "oppressive" social convention by both challenging and questioning the social discourses such as civic motherhood and female rational sexual selection appropriated in New Woman fiction.

I

As Ledger argues, "social purist feminism grew out of the feminist campaigns against the Contagious Diseases Acts in the 1860s" (Marshall 158). Ledger explains that "under terms of the Acts, women suspected of prostitution could be forcibly detained and treated in a 'Lock Hospital' for up

to three months”(158). On the other hand, the Acts were not applied to men. As a result, concerning this inequality and its outcome, Ledger states:

The Contagious Diseases Acts of the 1860s were predicated on the assumption that it was the female body that was responsible for polluting the larger social body. The social purity movement turned this predicate on its head, arguing instead that it was male sexuality and the male body that most needed to be controlled. (158)

As Showalter also points out in *A Literature of Their Own*, the “female crusaders” thought that “the male sex drive was causing cosmic degeneracy and devolution”(187), and in this kind of social purity movement, “women took up the righteous battle to change and elevate the sexual morality of men” (188).

However, what is noteworthy in Grand’s “Eugenia” is that, ironically, this women’s political role of improving men’s morality is appropriated by men at their disposal. Brinkhampton, a libertine character, says to the narrator through the window of a carriage which stopped by the entrance of a theater:

“I am sick of all that. I’m utterly used up. I think it’s time for me to reform and marry. Can you recommend me to somebody who would make a nice wife? I suppose it wouldn’t do for me to ask you for a seat in your carriage at this time of night?” (118)

Brinkhampton wants to marry because he has gotten tired of pleasures like theater. As a result, he asks the narrator to recommend him to “some one who has lived all her life at the back of beyond, never been anywhere nor seen any one to speak of, and is refreshingly unsophisticated enough to mistake the first man who proposes to her for an unsullied hero of romance”(120). What is important here, however, is that, judging from the words of “mistak[ing]” him for “an unsullied hero of romance,” we can infer that Brinkhampton has some health problems in his own body.

In fact, the narrator says about Brinkhampton: "[. . .] the fact that he was reeking of tobacco and stimulants could not fail to impress me unpleasantly, and his somewhat bloated features, inflamed eyes, and dissipated appearance generally rendered him still more unattractive to my fastidious mind" (118). Moreover, though the truth remains unclear throughout the text, Brinkhampton may have been suffering from some kind of moral or sexual disease. This is quite possible from two reasons. For one thing, the narrator describes Brinkhampton's skin condition as follows:

It was evident from the way he was dressed that the matter had cost him some thought, but no care could conceal the "used up" look about his eyes, nor produce a deceptive tinge of health on the opaque sallow of his cheeks. The effort had not been wanting, his valet having obviously done his best; but it is only a fresh and healthy skin that really takes paint and powder well: the transparency once lost, artificial attempts to restore it show on the surface like a light layer of dust on standing water. (119)

Apparently, Brinkhampton has some problems in his skin, and he tries to conceal it with cosmetics in vain. This is important because the skin problem is a symptom of venereal disease. For another, in relation to the symptom, Brinkhampton's occupation is quite significant. Here, the narrator dares to mention Brinkhampton's career as a "guardsman" in the text (119). Most probably, there is some intention of the narrator in this description; for we can easily imagine the connection of guardsmen with prostitutes in the Victorian society. As Ledger notes, in those days, there was "near terror concerning the spread of venereal disease, particularly amongst members of the armed forces" (*The New Woman* 111).¹⁵

Considering thus, we can infer that Brinkhampton would also have made some sexual errors in the past. What is worse, it necessarily leads to the conclusion that there is a strong possibility that his matrimonial partner will be infected with the disease in the future. However, the narrator cannot refuse Brinkhampton's request and introduces him

to Eugenia, the lady of a manor, after all.

II

Our main concern here is whether Eugenia will fall a victim to Brinkhampton or not. However, what Grand intended to do in this story was not to describe the conventional self-sacrifice of women to men but to suggest an idea of "rational female sexual selection" by women who were thought to be innately far superior to men in morality.²³ This insistence on the female eugenic choice of a reproductive partner is also stated in her essay "The Man of the Moment" (1894). Grand insists that the modern woman's "ideal of a husband is a man whom she can reverence and respect" (52). According to her, "[p]hilosophers show that the stability of nations depends practically upon ethics"; and "[t]he man of the moment does anything but aspire, and it is the low moral tone which he cultivates that threatens to enervate the race" (52). Grand goes on as follows:

In fact, were it not for the hard fight women will make to prevent it, there would be small hope of saving us from flickering out like all the older peoples. Woman, however, by being dissatisfied with the inferior moral qualities of her suitors, is coming to the rescue. The unerring sex-instinct informed her that a man's whole system deteriorates for want of moral principle. Feeling was her guide at first. Something about the man repelled her, and she would not have him; that was all. Now she knows. (52)

Grand says that the "modern girl" judges her partner from the "moral point of view," and that "[t]he instinct of natural selection which inclined her first of all to set him aside, for his flabbiness, is strengthened now by her knowledge of his character" (55). The modern girls discuss with each other concerning men's "horrid past"; and as a result, "it is in vain for the man of the moment when he marries to hope to conceal the consequences

of the past from his wife" (56).

Actually, in the text Brinkhampton tries to conceal his defects and appear to be "manly," but Eugenia closely observes him and "laughingly suspect[s] stays" in respect of his appearances ("Eugenia" 124). Moreover, Brinkhampton's lack of moral sense is also presented by the fact that he drinks "claret" and "hock" in the morning and enters the church "in the middle of the litany" (125).

In this way, in the text, Eugenia consistently watches Brinkhampton and carries out the sexual selection of a husband by herself. However, one thing which we must not overlook here is that the issue is also presented to us in relation to the problem of "sins" and "curses" of Eugenia's ancestors. According to a legend recorded in ballads, hundreds of years ago, an ancestress of Eugenia drowned her bridegroom on the wedding day, since "she suspected that he was a coward" (153). Eugenia says about this "husband's courage" further:

"And since then, Eugenia pursued, "it has been the custom for the women of my house to choose their husbands for their courage. [. . .] When a lover presents himself, some occasion is sure to arise which will test him, and if he is found wanting in manliness he must go." (157)

Eugenia's ancestresses have thought much of their husbands' courage and chosen them by this standard. However, as a result, "no son of the house has ever succeeded" for some reason (152). In the text, the curse descended to the family is not clearly explained, but most probably it is concerned with the problem of "courage." Then, what kind of courage did Eugenia's ancestresses mean by the word? Saxon Wake (one of the main characters and later Eugenia's husband) says that "at that time a man had to have as much physical courage as he has nowadays to have moral courage to recommend him to a girl —" (153). From this, we can see that once a man's physical courage was considered to be the most important quality for a husband. Concerning this man's "physical courage," however, Grand herself seems to have objected to the contemporary

public values. In fact, Grand, like Saxon, highly evaluates "moral courage" and states in her essay "The Man of the Moment" that "[m]ere brute courage will not do at the present time" (54); and she continues:

Physical courage is a physical condition proper to healthy people, and too common to be of any account at this period of our progress without moral courage to dignify it. Without moral courage, there is no such thing as manliness. (54)

Here we can see that Grand does not have a good image about man's physical courage; for her, it needs to be complemented by moral courage to become perfect as true "manliness."

III

In fact, in the text, Eugenia, as Grand does in her essay, also says about man's physical and moral courage that "[a] man must have both" ("Eugenia" 153); and at last, Eugenia chooses not Brinkhampton but Saxon as her marital partner. This is because she "want[s] a man without unpleasant associations of any kind about him – a whole man, and not the besmirched remnants left by scores of ignoble passions" (178). Moreover, Eugenia connects the need of man's morality with her family history, and says about the need of women's "discrimination in the choice of men":

"[. . .] it was always the men who brought misfortune into the family. Or rather I think it would be fairer to say that the women brought it upon themselves by their want of discrimination in the choice of men. Drunkenness, dissipation, extravagance and disease, all the misery-making tendencies they ignored when they chose their husbands. Women are such owls! always ignorantly idealizing when they ought to know – know exactly. [. . .]" (179)

Eugenia finally takes notice of the fact that women have as much responsibility for the

family curse as men. She acknowledges as follows:

"[. . .] I was once tempted by the delicious smell of a dish of peaches to bite one in the dark, and it had a wasp in it; and from what I have observed of life, it has always seemed to me that accepting a man in ignorance of everything concerning him except that his social position is satisfactory and his manners and appearance are pleasing, is like picking up a peach and eating it in the dark. Of course, it may be a very good peach, but, on the other hand, it may have a wasp in it, or be rotten." (181)

This kind of insistence by Eugenia is also indicated later again in Grand's essay "On the Choice of a Husband" (1898). In this way, in her short story, Grand revealed the mistakes of women's idealization of men and taught them how to choose their husbands correctly in terms of health. As Richardson points out, "[r]ewriting the love-plot, she [Grand] exposed the health risks of conventional romance" (123). As a result, Eugenia, who finally selected her husband correctly, does her "maternal duties" happily ("Eugenia" 184). Concerning her child too, he "looks strong enough" and the family curse is removed. What is the most important is that here again Eugenia attributes the family curse to her ancestresses' way of choosing their husbands ; they had chosen their husbands based on mere "animal courage," but Eugenia has just now chosen Saxon Wake for his "moral qualities" (184).

IV

As we have seen, the reason why Eugenia finally selected Saxon Wake was concerned with the political ideas of the New Woman writers. Actually, in the text, the narrator says that Eugenia "was, in fact, essentially a modern maiden richly endowed with all womanly attributes, whose value is further enhanced by the strength which comes of the liberty to think, and of the education out of which is made the material for thought"

(149). The narrator still continues: "With such women for the mothers of men, the English speaking races should rule the world"(149). Thus, through the process of Eugenia's eugenic sexual selection, in her literary text, Grand has presented a kind of New Woman writers' complicity with nineteenth-century British imperialism.

However, in spite of Grand's social purist strategy, even in this "manual on eugenics," we can see some ambiguity regarding the insistence on women's moral superiority to men. As Ann Heilmann points out, "Grand's social purist message was embedded in an exceptionally candid exploration of female sensual awakening" (*New Woman Strategies* 37).³⁾ In fact, in Grand's text, the narrator says that "[t]here is no doubt that Brinkhampton had awakened the dormant possibility of passion in the girl" ("Eugenia" 178). It is quite clear that Eugenia was at first attracted by Brinkhampton's "animal courage."

Significantly, the insinuation of women's passionate sexuality in the text contradicts the New Woman writers' assertion that women are innately moral existence and always the innocent victims of men's sexual passions. Concerning this argument, it is necessary for us to consider the opinions which Grand and Hardy contributed to a symposium entitled "The Tree of Knowledge" given by *The New Review* in June, 1894. The former's opinion was, as we have already confirmed, about the importance of women's knowledge on their would-be husbands' deeds in the past before they actually get married. On the other hand, what is important is that, while saying, as Grand does, that women should not get married without knowing men's past, Hardy also states as follows:

Innocent youths should, I think, also receive the same instruction; for (if I may say a word out of my part) it has never struck me that the spider is invariably male and the fly invariably female. (*Thomas Hardy's Public Voice* 132)

What is significant here is that for Hardy victims are not necessarily women; that is, men can also become victims to women's voracious sexuality. Here we can understand that,

sympathizing with women in most cases, Hardy might also have a different opinion from the New Woman writers about the sexual matters. Of course, it is true that many critics have regarded Hardy as a feminist male writer who feels deep sympathy with innocent women;⁴⁾ but the issue is not so simple. Actually, even among critics there is still no consensus about Hardy's attitude towards women.

Concerning this problem, Dutta examines Hardy's descriptions and comments on women in general and his various female characters in detail. As a result, according to Dutta, there is both sympathy and misogyny about Hardy's attitudes towards his female characters. Taking *Jude* as an example, Hardy shows some sympathy to Sue and "tones down his [Jude's] original condemnation" in his 1912 revision of the text; "[i]n the case of Arabella, however, Hardy's sympathy is much less in evidence" (Dutta 122). Concerning this point, Dutta refers to a textual revision in 1903, in which Arabella was turned from "a complete and substantial female human" into "a complete and substantial female animal"; and she concludes: "In sliding down the evolutionary ladder – from 'human' to 'animal' – we suspect that Arabella forfeits some of her creator's imaginative sympathy, [. . .]" (122).

Thus, we can see Hardy's misogynistic attitude towards Arabella in the text. However, before accepting Hardy's descriptions of Arabella as such, we also need to think over the negative descriptions about Arabella from a different angle; for it is possible that there may be some critical reasons why Hardy handles Arabella in the misogynistic way in the text. In fact, this conundrum can partly be clarified in considering its relation to the contemporary New Woman fiction. When Hardy wrote *Jude*, Grand and other New Woman writers insisted on women's innately moral superiority based upon "motherhood," and spontaneously took part in the British imperialism from the contemporary feminist perspective. However, Hardy's Arabella is quite the opposite of such ideal women depicted in New Woman fiction. Actually, concerning motherhood, as Dutta points out, Arabella is "callous"; and in the text, "the total atrophy of her maternal instinct is revealed in her visit to Jude and Sue after the

children's deaths" (Dutta 115). Dutta also states that Little Father Time's death "seems to leave Arabella with no perceptible signs of guilt or remorse" (116). Considered thus, most probably, in the text, Hardy deliberately described Arabella's lack of "motherhood" in a misogynistic way, in order to question the political discourse of "civic motherhood" which the New Woman writers too emphatically described in their literary texts.

Furthermore, there is another significant difference between Arabella and the ideal heroines in Grand's texts in relation to moral issues. While the contemporary New Woman writers saw "guardsmen" and "sailors" as dangerous because they infected women with venereal diseases and actually Grand's heroine, Eugenia, most probably rejects Brinkhampton for "rational sexual selection," in Hardy's text, curiously enough, animal-like Arabella makes the following conversation with her friends:

'As a husband.'

'A countryman that's honourable and serious-minded, such as he; God forbid that I should say a sojer or sailor, or commercial gent from the towns, or any of them that be slippery with poor women! I'd do no friend that harm.' (*Jude* 47)

What is interesting here is that Hardy also refers to a "soldier" and a "sailor" as unfavorable to women; however, importantly, Arabella and her friends do not seem to be concerned with the danger of venereal diseases at all, unlike Grand's heroine. Rather, they only worry about the men's slipperiness with regard to marriage. As a result, one of Arabella's friends says that "Nothing venture nothing have" (47); and accordingly, Arabella carries out the plan and entraps Jude without knowing either his character or his past well. It is quite clear that, as her "curiously low, hungry tone of latent sensuousness" also suggests (47), Arabella wants Jude in a sexual sense, and she tries every attempt to fulfill her own sexual desire without thinking of its outcome or other things such as "the health of the nation." Interestingly enough, on the topic of sexual selection, in the text, Hardy presents a spider-like woman who catches a man just as she

instinctively wishes.

Moreover, Arabella as a "spider" is presented in the episodes of her producing dimples in the cheek and wearing false hair. Arabella learned all these things when she worked as a barmaid in the past, and practices them to sexually appeal to men. Interestingly enough, here we can find out that, in Hardy's text, as well as a spider-like woman, a victimized man who marries a woman without knowing her past is described. In fact, Jude did not know Arabella's past before his marriage. Ironically, the gender roles of Hardy's Arabella and Jude are quite the opposites of what the New Woman writers consistently depicted for their own political purposes in their texts.

As we have thus far seen, Hardy's Arabella acts in quite a different way from the female characters described in New Woman fiction. Furthermore, Patricia Ingham even calls Arabella "a New Fallen Woman" (147). Ingham states that "Hardy was one of those prepared to accept a different construction of femininity which would rewrite both the ideal womanly woman and her reinforcing opposite, the fallen woman as well as the New Woman" (140); and she continues: "This is evident in Grace Melbury and Sue Bridehead on one hand, and Tess and Arabella Donn on the other" (140). What is interesting for us in particular is that, as Ingham notes, "[t]hey are struggling to achieve a certain autonomy for themselves of a kind that baffles the men they are involved with and even the narrators who describe them" (140). As a result, Arabella's continuous sexual adventure in the text takes on a new important meaning; for according to Ingham, "[t]he fate of such women is characteristically suicide by drowning" and "[s]uch a death serves to represent at once punishment and a cleansing" (147). However, Arabella "does head for the river but it is in search of Vilbert, the chosen candidate for her third husband, not to attempt suicide" (Ingham 147).

In this way, Arabella has consistently run counter to our conventional reading from start to finish. It looks as if Hardy just pretended to comply with the convention, but actually intended to describe things quite differently from our expectations from the start.

This is highly possible; and it is really an effective strategy to subvert the dominant

cultural or political discourse. Indeed, it is true that Arabella belongs to the working class, and at a glance, it seems wrong to simply compare her views of things with those of middle-class women. But actually, Arabella, like the middle-class women, recognizes the cultural or social discourses based on Christianity or other scientific discourses required of contemporary women and demolishes them from within. According to Shirley A. Stave, "[i]n what is essentially her defence of wife-beating, Arabella is revealing the level to which she has absorbed culture's messages, even to the point where she can cite scripture to condone violence against her own gender" (129). However, what is curious is that "she [Arabella] does not for a moment consider that such practices should apply to her – one need only imagine the consequences if any man tried to chain up Arabella" (129).

To give another example, actually in the text, Arabella says to her friend, Anny: "I came here to-day never thinking of anybody but poor Cartlett, or of anything but spreading the Gospel by means of this new tabernacle they've begun this afternoon" (*Jude* 331). At this stage, Cartlett has already been dead and Arabella has turned into a widow "conscious not only of spiritual but of social superiority" (329-30). However, what matters most is that despite her "awakening" (330), Arabella abruptly exposes her change of mind "another way quite" after hearing of Jude and seeing his wife, Sue (331):

"I've heard of Jude, and I've seen his wife. And ever since, do what I will, and though I sung the hymns wi' all my strength, I have not been able to help thinking about 'n; which I've not right to do as a chapel member." (331)

Anny tells Arabella to "take a lock of your late-lost husband's hair, and have it made into a mourning brooch, and look at it every hour of the day" (332); but Arabella says: "I haven't a morsel! – and if I had 'twould be no good" (332). For Arabella, the religion is quite useless: "After all that's said about the comforts of this religion, I wish I had Jude back again!" (332). In addition, Arabella's uncontrolled sexual desire is revealed in the

following conversation:

"Fie, Abby! And your husband only six weeks gone! Pray against it!"

"Be damned if I do! Feelings are feelings! I won't be a creeping hypocrite any longer – so there!" (332)

Arabella has tried to turn into a chapel member and brought tracts to distribute at the fair; but "as she spoke she flung the whole remainder of the packet into the hedge" (332); and finally she says: "I must be as I was born!" (332).

In the text, thus, Arabella strongly demonstrates the impossibility of suppressing her sexual desire by means of religious or cultural discourses. Peter Widdowson argues that Hardy uses Arabella "at once to caricature patriarchy and to distance the reader from the naturalized 'fiction' of male superiority and power" (182). If Arabella, as Widdowson notes, "articulates a subversive counter-discourse to the dominant socio-sexual ones" (182), here she will subvert the social discourse which represents not only male power but also the political views of the New Woman writers. Widdowson states that Hardy was conscious enough of "the fictionality of his fictions" and the "radical 'underground' Hardy [. . .] can be read as simultaneously creating illusion and deconstructing it" (173). When we reread *Jude* from such a viewpoint, we can newly regard Arabella's animal-like descriptions as not negative but very meaningful ones for the interpretation of the work in quite a new light. Arabella was actually described by Hardy in the misogynistic way and, as a result, was detested by the contemporary critics.⁵⁾ However, probably it was just what Hardy intended from the start, and it was for the sake of drawing readers' attention to the too "decent" social discourses which oppressed women, and, at the same time, of exposing the artificiality of the discourses by indicating the ambiguities and contradictions about the outcome of the oppression of women's sexuality in the text.

V

We have observed above that Hardy's Arabella has been performing in quite an opposite way to the patterns of women in New Woman fiction in two points. In particular, their attitudes in selecting their husbands were quite different. Unlike Eugenia who has chosen her husband for moral courage, Arabella has been choosing any man who was readily available as her sexual partner. Furthermore, interestingly enough, the moral standard of "sexual selection" by Arabella has been falling down stage by stage. In fact, finally she even has chosen Vilbert, a quack doctor. But this man may not be her "final" in a true sense; for Arabella continues to live and may pursue her sexual adventure as ever. What is the most ironic to the New Woman writers then is that animal-like Arabella is much "healthier" than Sue Bridehead, whose sexuality has been oppressed by the social discourse of "motherhood" which was emphatically instructed in New Woman fiction.⁶⁾

Considered thus, it is highly probable that the social or cultural discourses challenged by Arabella in the text were those of the oppressive "civic motherhood" and "rational female sexual selection" which were both proposed by the New Woman writers in their literary fiction and political pamphlets. On the other hand, "Feelings are feelings! I won't be a creeping hypocrite any longer" – most probably, these Arabella's words represent almost all that Hardy wanted to say in his final novel. In this way, through the misogynistic descriptions of Arabella, paradoxically, Hardy challenged the dominant sexual ideologies demonstrated in the contemporary New Woman fiction.

This article is part of the research supported by MEXT KAKENHI, Grant-in-Aid for Young Scientists (B), subject number 22720108. This is also a revised version of the paper read at the 54th General Meeting of the Thomas Hardy Society of Japan at Chuo University on 29 October 2011.

Notes

- 1) According to Ledger, "[f]or every thousand men in the army in 1859, for example, there were 422 reported cases of venereal disease" and "[p]rostitution was blamed for the spread of disease" (*The New Woman* 111).
- 2) Concerning the sexual selection of a husband by a woman, Richardson states: "Given the unhealthy tendency of men to promiscuity and vice, and the natural instinct of women to virtue, social purists and eugenic feminists increasingly emphasized the importance of female choice of a reproductive partner, replacing male passion with rational female selection" (49).
- 3) Although Heilmann says that this fact of female sexuality is "[w]hat proved so unnerving to male readers" (37), I think that it will also challenge the New Woman writers' political insistence on the women's moral superiority to men.
- 4) For example, Margaret Elvy states that Sue's views that "marriage is legitimized oppression and suppression" are consonant "not only with mainly Anglo-American second wave feminism, but also with postmodern feminism, as well as gay, queer and lesbian cultural theory" (142-3).
- 5) As Simon Avery notes, the contemporary reviewers of the *Guardian*, *The World*, and *The Bookman* all criticized Hardy for Arabella's coarseness or the novel's "moral wilderness" (22-3). Also, Margaret Oliphant saw "Arabella as more pig-like than the pig itself" (25).
- 6) Penny Boumelha argues that "Sue's 'breakdown' is not the sign of some gender-determined constitutional weakness of mind or will, but a result of the fact that certain social forces press harder on women in sexual and marital relationships, largely by virtue of the implication of their sexuality in child-bearing" (153). Boumelha also discusses the relationship between the New Woman novelists and motherhood, and states: "Even among the apparently radical New Woman novelists, there is wide-spread agreement that motherhood is a divinely – and biologically – appointed mission, providing the widest and purest field for the exercise of the 'innate' moral qualities of the woman" (153). According to Boumelha, Hardy's "*Jude the Obscure* poses a radical challenge to contemporary reformist feminist thought [. . .]" (153).

Works Cited

Avery, Simon. *Thomas Hardy: The Mayor of Casterbridge / Jude the Obscure. A Reader's Guide to Essential*

- Criticism*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009.
- Boumelha, Penny. *Thomas Hardy and Women: Sexual Ideology and Narrative Form*. Sussex: The Harvester Press, 1982.
- Dutta, Shanta. *Ambivalence in Hardy: A Study of His Attitude to Women*. 2000. London: Anthem Press, 2010.
- Elvy, Margaret. *Sexing Hardy: Thomas Hardy and Feminism*. 1998. Maidstone: Crescent Moon Publishing, 2007.
- Grand, Sarah. *Our Manifold Nature*. Whitefish: Kessinger Publishing, 2006.
- _____. "On the Choice of a Husband." Heilmann. 106-111.
- _____. "The Man of the Moment." Heilmann. 50-57.
- _____. "The Tree of Knowledge." Heilmann. 65-66.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. Ed. Patricia Ingham. 1985. Oxford: Oxford University Press, 1998.
- _____. "The Tree of Knowledge." *Thomas Hardy's Public Voice: The Essays, Speeches and Miscellaneous Prose*. Ed. Michael Millgate. Oxford: Oxford University Press, 2001. 131-2.
- Heilmann, Ann. *New Woman Strategies: Sarah Grand, Olive Schreiner, Mona Caird*. Manchester: Manchester University Press, 2004.
- _____, ed. *Sex, Social Purity and Sarah Grand. Volume 1: Journalistic Writings and Contemporary Reception*. London: Routledge, 2000.
- Ingham, Patricia. *Thomas Hardy*. Oxford: Oxford University Press, 2003.
- Ledger, Sally. "The New Woman and Feminist Fictions." *The Cambridge Companion to the Fin de Siècle*. Ed. Gail Marshall. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. 153-68.
- _____. "The New Woman and the Crisis of Victorianism." *Cultural Politics at the Fin de Siècle*. Eds. Sally Ledger and Scott McCracken. 1995. Cambridge: Cambridge University Press, 2003. 22-44.
- _____. *The New Woman: Fiction and Feminism at the Fin de Siècle*. Manchester: Manchester University Press, 1997.
- Richardson, Angelique. *Love and Eugenics in the Late Nineteenth Century: Rational Reproduction and the New Woman*. Oxford: Oxford University Press, 2003.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. 1977. Princeton: Princeton University Press, 1999.

_____. "Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle." *Sex, Politics, and Science in the Nineteenth-Century Novel*. Ed. Ruth Bernard Yeazell. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986. 88-115.

Stave, Shirley A. *The Decline of the Goddess: Nature, Culture, and Women in Thomas Hardy's Fiction*. Westport: Greenwood Press, 1995.

Widdowson, Peter. *On Thomas Hardy: Late Essays and Earlier*. Basingstoke: Macmillan, 1998.

SYNOPSSES OF THE ARTICLES WRITTEN IN JAPANESE

Nature and the Challenge of Rhetoric: Some Implications of Reality in Thomas Hardy

SATOSHI NISHIMURA

Some of the problems central to the work of Thomas Hardy are open to rhetorical criticism. Among them is the problem of what he called the Immanent Will. While he supposes that this blind force governs the world in place of divine providence, he also suggests that it is so unknowable as to find expression only in personification, thus inseparable from the problem of anthropomorphism not as opposed to deism but rather as an instance of catachresis. This means that the prime importance of the notion of the Immanent Will lies not so much in the way it provides a clue to theological interpretation as in the way it draws attention to the significance of tropology for epistemology.

Personification is also fundamental to Hardy's treatment of nature. This trope for him, often catachrestic and thus comparable to what Paul de Man calls anthropomorphism, is not just something added to nature but rather an essential element in what constitutes nature. A good place in Hardy's work to explore this problem is *The Return of the Native*, in which Egdon Heath is personified in such a way as to have a performative effect on the fortunes of some of the characters living there, especially the heroine Eustacia Vye. One of the most important implications in her story is that personification is not just a cognitive trope that is crucial to an understanding of nature, but one that constitutes a serious challenge to the concept of "nature as such" and complicates the question of what humanness is. The novel thus suggests that Hardy's interest in nature is a disguised interest in personification to such an extent that in his view of reality the problem of the

influence of nature on man can be displaced by such a linguistic issue as the challenge of personification to man.

Sympathy with Animals in Thomas Hardy's Novels

SHUMPEI FUKUHARA

Focusing on an aspect of Thomas Hardy as an anti-vivisection activist, this paper examines how his sympathy with animals is embodied in his novels, especially in *Tess of the D'Urbervilles* and *Jude the Obscure*. Although Hardy's anti-vivisectionist ideas are propelled by Darwin's evolutionary theory, Hardy also learned from Darwin the cruelty of Nature. In other words, while Darwin taught him that all creatures were one family linked to each other with evolutionary chains, the idea of natural selection contributed to Hardy's pessimism with his protagonists suffering in the social environment which does not care about individual happiness. This paper illustrates how these conflicting impacts of Darwin are synthesized in scenes of sympathy with suffering animals, and argues that these scenes pose a question to conventional values.

Tess and *Jude* include a series of scenes in which protagonists feel sorry for animals in agony and kill them to relieve them from their suffering. In the scenes, two contradictory factors can be seen: although their compassion for animals is genuine, the actions they take are stained with blood. In this way, these scenes embody Darwin's two-way impact on Hardy.

Moreover, these scenes of sympathy challenge and subvert the conventional frame of mind. Sympathy with animals questions evolutionary hierarchy, for the protagonists stand on the same level as other species, which are usually regarded as lowly. Also, there is the reader outside the texts, who sympathizes with the protagonists sympathizing

with the animals. Through this lens of compassion, social hierarchy is challenged; social status of Tess and Jude are low, but when the reader stands in their positions and sees society from their viewpoints, the suppressing nature of society is revealed to the reader. Thus, the scenes of sympathy with animals lead to criticism of conventional social values.

The Subversive Cross: An Analysis of *The Woodlanders*

MIYUKI KAMEZAWA

When old Grammer signed a paper with a cross mark, nobody anticipated the grotesque change of meaning or value it was to bring about on itself; first it stood for her brain, which she had promised to the doctor for the price of ten pounds, and then the same mark is used as a kind of payment from him to the old woman for the given opportunity to get to know the beautiful face of Grace. *The Woodlanders* is full of stories about circulatory items (signs) such as money, bonds, female bodies and words which acquire other meanings than were originally meant. This essay is going to explore the process of how the signs subvert people's intentions. In doing so, it will bring into discussion social systems such as the monetary, the marriage and the language system.

As a typical example, the casual remark to the turnpike bonds in Melbury's possession can be interpreted as a precursor of a similar, but with much deeper, bitterness that visits him later; the marriage alliance he designs for his daughter will not bring the prestige he was aspiring to, nor the happiness he wished for her and himself. Meaningfully, the agony he experiences over her marriage is accompanied by the awakening sense of the uncertainty of words and reality; after all, it is the words "I do" that authorize a marital status.

To conclude, this is an attempt to read *The Woodlanders* as a text which depicts the

uncertainties of the marriage system and words against the backdrop of the unnerving instability of the economic world.

Jude the Obscure[d]: The Real Tragedy in *Jude the Obscure*

MASATO TORIKAI

Unless we grasp the true significance of Thomas Hardy's term, Nature, we will not understand the crux of the tragedy in *Jude the Obscure*. Hardy's concept of the term, with his capitalization (Nature), should not be confused with the supernatural (such as God and destiny) or the concept of nature as a mere natural phenomenon. Hardy criticizes his readers for their inability to associate the concept of this term with any but these meanings. The only key to a clear understanding of the term Nature exists in Hardy's metaphysics, or his 'question of Being'. This term has a close affinity with the word *phusis* (φύσις) used by ancient Greek thinkers, particularly, pre-Socratic philosophers. According to Martin Heidegger's interpretation, the philosophers' concept of *phusis* should be understood as 'Being itself' – it is not a thing or a being but 'beingness' because of which we are able to understand that things and beings 'exist'. However, as Heidegger points out, the current translation of *phusis* refers to nature in a general sense; this resulted from the distortion of the original meaning of the word: first, by Plato's explanation of *phusis* as 'idea' and then by the Christian interpretation of it as 'the Creator (God)'.

In the narrative world of *Jude the Obscure*, the hero struggles to reveal Nature as Being itself. However, this meaning is obscured by Platonic ideas and Christian doctrines. Defeated in this struggle, his original being as the seeker of Being itself becomes ambiguous (obscure) and is eventually obscured.

This paper includes a discussion of Jude's struggle, or the struggle over Being itself, and demonstrates that the heart of the tragedy of this novel lies in the 'obscuring' of Nature (Being).

A Laodicean and the British Empire: A Postcolonial Thomas Hardy

KAORUKO SAKATA

This paper aims to examine how far British imperialist ideology can be read in *A Laodicean* (1881). The first chapter demonstrates that the late Victorian novels wherein we can see imperialist ideology often depict the fear that British emigrants who had adopted the colonial vices should return to exert a harmful influence on the home country. The first half of the second chapter explains the significance of the degeneration of Captain De Stancy. In Victorian England, British imperialist ideology tended to attribute the moral deviation of emigrant Englishmen to sexual contact with colonial women. It is, therefore, highly probable that Captain De Stancy has lost his English virtues through his contact with a woman in British India. The latter half of the second chapter investigates the significance of the degeneration of William Dare who embodies the colonial experiences of Captain De Stancy. In Victorian imperialist discourse that tied race to geography, Dare's moral regression can be ascribed to his being born and brought up in the colony as well as to his mother's race. The third chapter analyzes Abner Power through the lens of postcolonial interpretation. In the light of imperialist ideology which convinced Victorian people that those Britons who were susceptible to the diseases peculiar to the colonies were easily Easternized or morally deteriorated, and therefore suspected as threats to the domestic homeland, Abner, who, in the manuscript, succumbs to malaria overseas, can be labeled as a potential menace to Victorian England. The concluding chapter interprets the destruction of Stancy Castle as a way of its defending itself against "reverse imperialism." Since the emergence of country house poems, country houses in literature have symbolized Britain writ large; thus, as long as Stancy Castle rejects inheritance by a man of non-English descent, it can be said that Hardy's disposal of Stancy Castle is suggestive of his endorsement of Victorian imperialist ideology.

日本ハーディ協会会則

1. 本会は日本ハーディ協会（The Thomas Hardy Society of Japan）と称する。
 2. 本会はトマス・ハーディ研究の促進、内外の研究者相互の連絡をはかることを目的とする。
 3. 本会につぎの役員をおく。
（1）会長 1 名 （2）顧問若干名 （3）幹事若干名 （4）運営委員
 4. 会長および顧問は運営委員会が選出し、総会の承認を受ける。運営委員は会員の意志に基づいて選出されるものとする。運営委員会は実務執行上の幹事を互選する。会長および顧問は職務上運営委員となる。役員の任期は 2 年とし、重任を妨げない。
 5. 幹事会は会長をたすけて会務を行う。
 6. 本会はつぎの事業を行う。
（1）毎年 1 回大会の開催 （2）研究発表会・講演会の開催
（3）研究業績の刊行 （4）会誌・会報の発行
 7. 本会の経費は会費その他の収入で支弁する。
 8. 本会の会費は年額 4000 円（学生は 1000 円）とし、維持会費は一口につき 1000 円とする。
 9. 本会に入会を希望する者は申込書に会費をそえて申し込まなければならない。
 10. 本会は支部をおくことができる。その運営は本会事務局に連絡しなければならない。
 11. 本会則の改変は運営委員会の議をへて総会の決定による。
- 附則 1. 本会の事務局は当分の間中央大学におく。
2. 本会の会員は会誌・会報の配布を受ける。
 3. 選出による運営委員の数は会員数の 1 割を目安とする。

（1987 年 10 月改正）

編集委員

金子幸男 佐野 晃
玉井 暲 永富友海
永松京子 新妻昭彦（委員長）

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報第 38 号

発行者 玉井 暲

印刷所 中央大学生生活協同組合

2012 年 9 月 10 日 印刷

2012 年 9 月 15 日 発行

日本ハーディ協会

〒 112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1 日本女子大学内